

特26

89

教育同志研究會編纂

尋常四年後期用

每時
配當
國語教授細案

43.9.17

東京 金港堂書籍株式會社

配每
當時
國語教授細案 (尋常四年後期)

目次

第一	皇太神宮	一
第二	參宮日記の一節	一六
第三	たけがり	三三
第四	寫眞をおくる手紙	四四
第五	働クユトハ人ノ本分	五四
第六	松下禪尼	六四
第七	白雀	七五
第八	ワザクラブ	一〇四
第九	かぢ屋	一一七
第十	花ごよみ	一二六

第十一	マツチ	一四〇
第十二	火事	一五四
第十三	電報	一六六
第十四	藤原鎌足	一七九
第十五	鳥	一九四
第十六	近江八景	二〇四
第十七	木綿着物ノ由來	二一四
第十八	手紙	二二七
第十九	胃と身體	二四一
第二十	虎ト猫	二五三
第二十一	世界の話	二六六
第二十二	橘中佐	三〇四
第二十三	橘中佐	三〇四
第二十四	橘中佐	三〇四
第二十五	名古屋	三三八

毎時配當 **國語教授細案** (尋常四年後期)

教育同志研究會編纂

第一 皇大神宮 (四時間)

形式

- 一 文章 兩括式。
 - 句々皆敬語を用ひ、簡潔にして、謹嚴の體を具ふ。
- 第一節 代々の天皇も國民も。
 - 記體文。(上下共に皇太神宮を崇敬する態度を記述す。)を以て、筆を起す。
- 第二節 たふときいはれ。
 - 敘事文。(皇太神宮の御由來を記述す。)を以て、第一項を承く。
- 第三節 天皇陛下御參拜。
 - 記體文。(皇太神宮を崇敬し給ふ帝室の一斑を記述す。)を以て、本文を結ぶ。

二 文字 宮(訓讀) 宮(宮) 既教) 代(代) 代(代) 既教) 生(生) 生(生) 生(生) 生(生) 類字既教) 諸

(言扁に者) 者(降) 降(降) 既教) 授(手扁に受) 勅(殿) 造(告) 告(類字) 吉(祭) 祭(既教) 使(使) 既教) 役(役) 既教) 陛下 平(平) 平(既教) 式

語句 代々。(代々といふも可なり。) たふとぶ。(尊。たふとむ。たつとぶ。重んず。) うやまふ。

(敬。尊びてゐやを盡す。つゝしみてつかふ。尊敬。) たふとき。(尊き。品位高し、尊ぶべし。) わがめ。(崇。おそれあふぐ。尊ぶ。敬ふ。) たまふ。(給ふ。動詞に添へて、他人の動作を敬ふ意の語。) 奉る。(身分の動作に添へて、他人を敬ふ意の語。) きはめて。(極。甚。最も。いと。) あつく。(厚く。ゆたか。こまやか。多し。深し。) 深し。(同上。) 一生。(一代。) 参拜。(拜。参詣。まうづ。まゐる。) 諸子。(おのゝ方。諸君。皆さん。同等以下の多くの人に對する代名詞。) かくばかり。(これほど。こんな。いはれ。(謂。いはるべき譯。) 授。(與ふ。たまふ。) 神勅。(神のおつげ。) 川上。(上流。みなもと。みなかみ。) 神殿。(神を祀る殿堂。) 神體。(神の本體。神社にて神の體として祀るもの。) 白木造。(木地のまゝにてつくりたるもの。) ごと。(毎。二十年たびに。) 御定。(さまり。) 勅使。(勅命を傳ふる使者。) 重だち。(主となる。かしらだつ。) 皇室。(天子の御家。天皇の御一門。) 平和。(平かに治まる。おだやかになる。) 前古。(昔。古。)

教授

一 縦斷的排列法に由り、左記の四教時に分つ。

第一時 第一節 代々の天皇も國民も。讀方。

第二節 皇太神宮の尊きいはれにつき。話述。

第二時 第二節 たふときいはれ。讀方。

第三時 第三節 天皇陛下御参拜。讀方。

第四時 全文復習。

二 注意

御神殿御神苑等の結構につきての教授は、第二課参宮日記の一節の文に譲り、本課は皇大神宮の尊きいはれと、上天皇陛下より下國民に至るまで、尊敬せる事とを知らしむるに止む。

参考

一 皇大神宮。

伊勢國度會郡五十鈴河上にあり。伊勢大神宮とも。大神宮とも、伊勢様 ともいふ。後世は豊受大神宮を外宮と稱するに對して、内宮と呼ぶ。朝廷にては宗廟と稱せらる。

皇孫瓊々杵尊降臨の時、大神親ら八咫鏡を授け給ひしより後、世々同床共殿に奉安せしめ給ふ。

崇神天皇の六年に至り、皇女豊鍬入媛命に命じて、始めて倭笠縫邑に移し奉り。更に八十餘年を経て、垂仁天皇の二十五年、皇女倭姫命に命じて、鎮座の地を求めしむ。因つて、神宮を此の地に定め建つ。

第一時

要目

- 一 第一節 代々の天皇も國民も。讀方。
 - 二 第二節 皇太神宮のたふときいはれ。話述。
 - 三 文字 宮。代。生。諸。
 - 四 語句 たふとび。たふとき。うやまひ。(以上三語對照して、意義及び用法を授く。)
 - あつく。深く。(以上二語對照して、意義及び用法を授く。)
 - たまふ。奉る。(以上の二語は共に敬語なれども、用法に至りては大に異なれを知らしむ。)
 - しむ。參拜。(既教の類語、拜、まゐる、さんけい、まうづ、を復習す。)
- 代々の天皇……國民もまた……。 (以上の二句は對偶の排列なることを知らしむ。)
- かくばかり。(右對偶の形をとれる二句を承けて、之れを統括す。)

代々。諸子。いはれ。

準備

- 一 第一課第二課の插畫擴大畫。
- 二 皇祖皇孫に御鏡を授け給ふ圖。

教授

- 一 左記の話述を以て第一節讀方の出發點とす。

此の地の氏神様は……、此の他天神様八幡様などの神社がある。尊敬せねばならぬ。

殊に尊いのは大神宮様である。大神宮様は、日本國中至る所にあるが、その一番もとの大神宮様は伊勢の國にある。伊勢といふのは此處から……の方、……里程の遠くにある。斯く遠くにあつては、朝夕參詣する事が出来ぬ。そこで、方々の土地に分祀したのである。しかし幾ら遠くとも、日本の國中である。一生に一度は是非伊勢の大神宮様に參詣せねばならぬと心がけるのである。これが即ち伊勢大神宮様の御社の繪である。(掛圖を示す。)

國民はかく大神宮様を尊敬するが、代々の天皇は如何遊ばすで有う。
話述中適宜の機會を見計ひ、左記の漢字を板書教授す。

皇大神宮。代々の天皇。國民。一生に一度。

二 第一節 朗讀。(新字 諸子 質問に應じて摘書す。)

三 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 「代々の天皇。」天皇に關する事を書ける文だけを讀んでごらん。

2 「國民もまた。」國民に關する事を書ける文だけを讀んでごらん。

3 「かくばかり。」天皇と國民と兩方に關する事を書ける文だけを讀んでごらん。

四 範講。

五 語句の吟味及應用。

1 「たふとぶ。」類語は何か。(うやまふ。)

右の二語に於て、發音に相違はあるが、意義は同じである。短い文の中に、同じ發音の語を重ねると聞きにくい。そこで、發音の違ふ類語を用いたのである。

2 1と同様の注意を加へた語がある。(あつく。深く。)

3 「たまふ。」と「奉り。」は、同じく敬語ではあるが、用ふる場合が大層違ふ。實際使つて見るとよく分る。(…が喜びたまふ。…が…にお祝を申奉る。)

4 「きはめて。」を應用してごらん。(きはめて苦しい。きはめて深い。)

5 参拜の類語を考へてごらん。(まゐる。さんけい。まうづ。)

六 第一節 達讀。

七 第一節 「いはれ。」の語より導き、第二節の内容につき、話述を行ふ。

1 「たふとぶいはれ。」とは如何なる意義であるか。(「たふといわけ。」といふこと。)

2 大神宮は、代々の天皇も尊ばれる。國民も一生に一度は是非参詣せねばならぬと迄に、敬ふ。かく上下ともに、尊敬するのには何か譯がなくてはならぬ。いはれがなくてはならぬ。そのいはれを知らないでは、折角の尊敬も尊敬とならぬ。それ故、これから其のいはれについて、話をする。

3 皇祖大神 皇孫に御鏡を授け給ふ掛圖を觀察せしむ。

4 第二節の内容につき、話述を行ふ。(第二節 皇祖天照大神をまつりたまへるなり迄。)
話述中便宜の機會を見て、左記の句を板書し、本文讀方の豫習とす。

神勅。この鏡を見ること我を見るが如くせよ。

神殿。五十鈴の川上にあり。

第二時

要目

一 第二節 皇大神宮のたふときいはれ。讀方。

右いはれにつきての大意は、第一教時に於て、話述を以て授けたり。

されば本教時に於ては、左記の形式の教授と共に、皇大神宮の尊きいはれを悟らしめんことを期す。

二 文字 降。授。勅。殿。造。

三 語句 授く。神勅。あがむ。(第一節の「たふとび。」「うやまい。」「と對照す。) 神殿。川上。二十年ごとに。御定。

「この鏡を見ること我を見るが如くせよ。」第二課の御製「とこしへに民安かれといのるなる。我が世を守れ、伊勢の大神。」と對照して、皇祖の御高德につき、崇仰の念を深からしむ。

「昔ながらの白木造。」第二課「何の御かざりもなき質素なる御かまへ、かへつてかしこくかたじけなし。」と對照して、教授す。

準備

一 第一課第二課の挿畫擴大畫。

二 皇祖皇孫に御鏡を授け給ふ掛圖。

教授

一 第一節達讀。

二 左記の設問を以て、第二節の讀方に導く。

1 「いはれ」の意義は如何なる事か。

2 皇大神宮の尊きいはれを簡單に話してごらん。

三 第二節に屬する左記の文字及び語句を摘書して教授す。

1 に、ぎのみことを日本の國に降したまふ。

2 鏡を授けたまふ。

3 代々の天皇はこれを宮中にあがめたまふ。

4 神殿は昔ながらの白木造。

四 第二節 反覆熟讀せしむ。

五 三の板書を利用し、左記の設問に由り、本文の理解を確實にす。

1 「に、ぎの尊を日本の國に降したまふ。」「いつの事である。(神代の昔。) 誰が。(皇祖天照大神が。) 降すといふのは。(およこし遊ばす事。)

2 「鏡を授けたまふ。」誰が誰に。鏡の名は何といふか。其の時皇祖は何と仰せになつた。

- 3 「代々の天皇はこれを宮中にあがめたまふ。」代々の天皇が、みな同じ様になさるのは、どなたの思召か。(神勅。)其の神勅は。(この鏡を見ること……。)
 - 4 今上天皇陛下も矢張宮中にあがめたまふのであるか。(今はさうでない。)
 - 5 皇大神宮はどなたをまつてあるのか。(天照大神を。)御神體は。(八咫の鏡。)
 - 6 皇大神宮はかくも尊き御宮なれば、御神殿の結構は、金銀の光、丹青の色で、まばゆきまでに、輝きわたつてをるであらう。(さうでない。白木造である。)
 - 7 其の他神殿について知つて居るところを話してごらん。
- 六 範講
- 七 達讀 講讀

第三時

要目

- 一 第三節 天皇陛下の御參拜。讀方。
 祖宗を崇敬し給ふ天皇陛下の御高德を崇仰せしむ。
 - 二 文字 祭。使。告。役。陛下。平。式。
 - 三 語句 重たち、勅使。皇室。平和。あらせられ、前古たぐひなし。
- 準備
- 一 天皇陛下伊勢御參宮の鹵簿の御様子を寫せるもの。
- 教授
- 一 左記の設問の下に第二節第一節を達讀せしむ。
 - 1 伊勢神宮の尊き御宮なる事のはれの書いてある節を讀んでごらん。
 - 2 かゝるたふとき御宮なれば、代々の天皇を初め奉り、國民は如何に尊敬しつゝあるかといふ事の書いてある節を讀んでごらん。
 - 3 代々の天皇は、第一節にある通り、皇大神宮を尊敬し給ふたのである。今上天皇陛下の御尊敬、亦代々の天皇に譲らせ給ふ事なき事が第三節に書いてある。
 - 二 左記の板書をなしつゝ、第三節の内容を話述す。
 - 1 「勅使。」天皇陛下のお使の事である。

2 「重だちたる祭日。」一年中に祭日はたくさんあるが、その中とりわけ大切な祭日の事である。神嘗祭新嘗祭秋季皇靈祭春季皇靈祭の様な祭日のこと。此の重だちたる祭日には、勅使を差立てたまふ。

3 「皇室及び國家に大事。」めでたい事でも、心配な事でも、普通でない重だつた事があると、必ず其の譯を皇大神宮に告げ給ふ。

4 「前古たぐひなかりき。」昔からためしがないといふ事である。

明治三十七八年戦役は、實に國家の大事である。それ故、いよいよ戦争が始まる事になつた時は、早速其の譯を告げ給ふた。ところが、其の戦争も目出度おさまつた。すると、天皇陛下は御自身御参拜あらせられて、「皇祖の威靈に向つて、戦争もめでたくおさまりました。」といふ事をお告げになつた。「前古たぐひなかりき。」といふのは、其の御参拜の時の御式の盛であつた様子を言つたのである。

三 第三節 默讀。(新字 告 役 陛下 平和 式 兒童の質問をまち、摘書して教授す。)

四 二に於て摘書せし語句につき、其の意義及び第三節の内容を設問す。

五 二に於て摘書せし語句を視寫せしむ。

六 第三節 達讀。

第四時

要目

一 全文復習。

1 全文達讀。

2 文章構成。題目命名。

3 語句の吟味。

教授

一 全文默讀。全文達讀。

二 文章構成。題目命名 につき、左記の設問を行ふ。

1 本課の文章は何節より成るか。(三節より成る。)

2 第一節の「かくばかり。」の語は、何の文を承けてをるのか。その文を讀んでござらん。今讀んだ文の中で、「かくばかりとふとき。」に、最も關係ある語は何か。(たふとび、うやまひ。)
「たふとび、といひ、」
「うやまひ」といふのは、何が何を尊ぶのであるか、敬ふのであるか。(代々の天皇が、又國民が、皇大神宮を。)

すると本節の題目は、「代々の天皇も國民も。」と命名する。

3 第二節を默讀なさい。

第二節は何の事が書いてあるのか、一言にして言ひ盡す事が出来る。

第一節の文章中の言葉をかりると、一番都合がよい。

その言葉を以て、本節の題目とする。(たふときいはれ。)

4 第三節を默讀なさい。第一節を默讀なさい。

第一節の題目は何であつたか。(代々の天皇も國民も。)

代々の天皇が尊び給ふ事と、國民が敬ひ奉る事と、どちらが詳しく書いてあるか。(國民が敬ひ奉る方が詳しく書いてある。)

代々の天皇の方は、詳しく書かうとしても、書く事柄が無いのであるか。中々左様ではない。有る有る大に有る。有るけれども、第一節に擧げなかつたのは、態と第二節第三節に譲つたのである。第二節の文を讀んでごらん。代々の天皇が皇大神宮を尊び給ふ事が書いてある。第二節だけではまだ充分でない。そこで第三節には、今一層詳しい事が書いてある。

5 第三節中最も注意をひき易い句は何か。(「前古たぐひなし」の句。)

かく盛なる御式のあつたのはいつか。(明治三十七八年戦役の終りた後も、天皇陛下御參

拜。)

此の「天皇陛下の御參拜。」の句を以て、本節の題目とする。

6 「終りたる後も。」此の「も」はなぜ必要があるか。(陛下の御參拜あらせられるのは此の時に限つた譯でないから。)

どんな時に御參拜あらせられるか。又陛下御自身に御參拜あらせられる事、事の出来ない場合には、どんなに遊ばすか。

三 左記の如く右題目を筆記せしむ。

第一節 代々の天皇も國民も。

皇大神宮 第二節 たふときいはれ。

第三節 天皇陛下の御參拜

四 語句の吟味

- 1 第一節に於て、異音同意の語を見出してごらん。(たふとび。うやまひ。あつく。深く。)
- 2 第二節に於て、右の「尊び 敬ひ」の類語を見出してごらん。(あがめ。)
- 3 「川上」といふ言葉があれば、これに對偶する言葉がなくてはならん。(川下。)
- 4 「かゝるたふとき。」の類語は何か。(かくばかりたふとき。)

五 語句の應用及び書取。

- 1 十一月三日のめでたき日なるいはれを知れりや。
- 2 白木のつくゑ。ぬりづくゑ。
- 3 七日ごとにさうじをする定なり。
- 4 前古たぐひなき戦役。

第二 參宮日記の一節 (五時間)

形式

一 文章 紀行文

旅行の順序を追へる敘事文を骨とし、風景を寫せる記對文、所感を述べたる説明文議論文等を肉として記述せるものなり。

題目は參宮日記なり。旅行中の日記即ち紀行文なり。第六卷第十一課太郎の日記は、即ち通常の日記なり。紀行文と趣を異にせる所多し。

第一節 神苑。(五頁一行迄。)

普通日記の體裁たる天候に關する事より、筆を起し、宇治橋に至る通路の模様の概略を記

し、神苑内の御様子を詳述す。

第二節 神殿。(七頁四行迄。)

これ本課の主要節なり。先づ古木老樹枝を交へたる御境内の神々しき御模様を寫し。次に恐るゝ御宮の前まで、歩を運びたることを述べ、次に神殿の御かまへにつき、質素なる様、却つてかしくかたじけなきを説く。最後に所感を記して本節を結ぶ。

第三節 外宮。(七頁六行迄。)

「神殿の御有様おほよそ内宮に同じと見奉る。」の句を以て、最も簡單に記述す。

第四節 年來ののぞみ。(終迄。)

所感を述べて全文を結ぶ。

二 文字

旗 御。(訓讀御、音讀 御既教。) 細。(訓讀細既教。) 右。(訓讀右既教。) 身。(訓讀身既教。) 老。(類字孝教既。) 垣。千。(音讀千既教。) 質。(類字質既教。) 素 御。(御に同じ) 外。(音讀外、訓讀外 外既教。) 幸。

三 語句

うららかな。(天麗、天晴れて長閑。) 清らかな。(氣好しの約かといふ。穢れなし。清淨。濁ら

ず。(神苑。(神社の境内にあるその。)戦利品。(戦争にて分捕りたる品。分捕品。)いづれも。(何れも。どれも。不定代名詞。)數千年も。へたる。(經。いく年月も)重なる。(老木。(老樹。古木。)枝をまじへ。(枝茂りて重りあふ。)天をつく。(衝。突。勢よし。)神々し。(ものさびて何となく尊く感ぜらる。神さびてある。尊くおごそか。けだかし。)いはん方なし。(言の外。名狀すべからず)うかがふ。(ひそかに見る。伺ふ。)かつを木。(堅魚木。宮殿神社の棟木の上に、數圍並べ付くる木。圓く長し。)千木。(「ひぢぎ」の義。上古の家づくりにて、さりむねの端の材を棟の角より組み合せて、空へ出したるもの、今はたゞ神社の屋根にのみ用ふ。うちちがふ。(打違。十の字の形。交叉。ぶつちがひ。)質素。(衣食住を飾らぬこと。奢らぬこと。儉約なること。儉素。)かまへ。(構。支度。用意。組立。結構。)かしく。(恐。畏。恐れ多し。勿體なし。)かたじけなし。(忝。辱。「難し氣なし。」「の意。畏し。恐れ多し。勿體なし。)とこしへ。(常長。「常し並。」の轉。いつまでも變らず。永久。)安かれ。(安くわれ。)いのる。(齊み宣るの約か。神佛に請ひ願ふ。)御製。(陛下の詠じ給へる歌。)國體。(國家を其の組織、特に主權の存在に由りて、觀察したる稱。)いよく。(彌。其上に進みて。ますく。)身にしむ。(身に感じ徹る。)年來。(日ごろ。年ごろ。長い間。)のぞみ。(望。おもはく。思。所存。)達す。(目的かなふ。)何等の幸ぞや。(どうし

た幸であるか。まわ幸な事である。仕合せな事である。)

以下の句は、森嚴なる御有様を寫し奉る用意なり。

「五十鈴川は流早くして水清らかなり。」

「數千年もへたらんかと思はる、老木枝をまじへて、高く天をつく。その神々しさいはん方なし。」

「玉垣御門の前にて拜し奉る。御垣の内をうかひ奉る。」

「質素なる御かまへ、かへつてかしくかたじけなし」

「とこしへに民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大神。」

「國體のたふとさ、いよく身にしみて、おぼゆ。」

内容

- 一 前課に關聯して、左記の國家的觀念を養ふ。
- 1 身實際に伊勢參宮をなし、森嚴なる御有様を拜し奉りしが如き感を與ふ。
- 2 「質素なる御構へ。」の句に由りて、皇祖の御仁徳は常長へに、我が國を守らせ給ふ事を知らしむ。
- 3 御製に由り、陛下の御仁徳は、皇祖の御仁徳と、並びて辱きことを知らしむ。

教授

- 4 「國體のたふとさ。」の句によりて、國體の尊嚴なる世界に無比なることを知らしむ。
- 一 縦斷的排列法に由り、左記の五教時に分つ。
 - 第一時 第一節 神苑。讀方。
 - 第二時 第二節 神殿。主要語句の板書教授及び話述に由りて、森嚴なる御有様を紹介す。
 - 第三時 第二節 神殿。讀方。
 - 第四時 第三節 外宮。第四節 年來ののぞみ。讀方。
 - 第五時 全文復習。

第一時

要目

- 一 第一節 神苑。讀方。
 - 1 第一小節 天候及び家々の國旗。(四頁三行立てたり迄。)
 - 2 第二小節 宇治橋のあたりの賣店。五十鈴川の流れ。(四頁六行清らかなり迄。)
 - 3 第三小節 神苑。(五頁一行迄。)

- 二 文字 旗。御。細。右。身。
- 三 語句 うららか。橋のたもと。水清らか。神苑。戦利品。いづれも。

準備

- 一 插畫擴大畫。

教授

- 一 插畫を觀察せしめ、話述若くは設問を行ふ。
 - 1 高い大きな木の鳥居 これは皇大神宮の鳥居である。
 - 2 立派な木の橋、これは宇治橋、橋の下を流れてをるのが第一課にあつた五十鈴川である。川の流は早い。さらさらと流れてをる。水は澄みきつて、實に奇麗である。
 - 3 橋の向ふに森が茂つてをる、これは皇大神宮の御庭園である。
- 二 左記の如く、板書しつゝ、話述を行ふ。
 - 1 「參宮日記の一節。」

尊き皇大神宮、是非參拜したいとは、年來の望であつた。幸に暇を得て、伊勢參宮の旅路についた。家を出てから、歸りつく迄、幾日かの旅。其の間に愉快な事感じた事が澤山ある。それ等はみな參宮日記の中に載せてある。中でも、つよく感じたのは、大神宮へ參拜した時

である。本課は、即ち参宮日記の中の一節。参拜した時の事が書いてある。

2 「うらゝかな天氣。」

参拜したのは十月十七日、丁度神嘗祭の當日である。天氣はと言へば、一面に晴れて、風はなし、實に心地のよい長閑な日であつた。

3 「流早くして水清らか。」

八時に宿を出た。御山木細工や、貝細工などを賣つてをる店を見ながら、挿畫にあつた宇治橋まで行つた。橋の下を見ると、五十鈴の川の流の早くて、水の奇麗なるは實に生々する。

4 「神苑。」

橋を渡ると神苑である。お宮の庭園である。廣い道の左右に、梅松櫻などが澤山植ゑてある。

5 「戦利品。」

明治三十七八年戦役や、二十七八年戦役に分捕つた戦利品が、神苑の内にある。

三 新出文字 摘書教授。

四 第一節 朗讀。

五 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1. 参宮當日の天氣はどんなであつたか。其の他何か變つた事はなかつたか。(うらゝかなる天氣。家々には日の丸の旗を立てゝゐた。)

それは何月何日何の日であるか。(十月十七日、神嘗祭の日。)

2 御山木細工貝細工などを賣つてをる店は、どの邊に多いか。(宇治橋のあたり。)

橋の下を流れてをる川の名は何といふか。(五十鈴川。)川の流はどんなであるか。(流が早くて、水がきれいである。)水のきれいなを何といふか。(清らか。)

3 橋を渡つたところはどこか。(神苑。)神苑の内に最も目立つものは何か。(明治三十七八年戦役や、二十七八年戦役に分捕つた大砲……)

分捕つた品を何といふか。(戦利品。)

六 全文達讀。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

1 うらゝかなる天氣。日の丸の旗。

2 御山木細工。流早くして、水清らかなり。

3 道の左右。日本海戦の紀念砲身塔。

第二時

要目

- 一 第二節 神殿。(七頁四行迄。) 讀方。
- 1 主要語句の板書教授及び話述に由りて、伊勢神宮の森嚴なる御有様を紹介す。
- 二 文字 老。 質素。 御製。
- 三 語句 老木枝をまじへて、高く天をつく。 神々しさいはん方なし。 清き水にて口をすすぎ
手を洗ふ。 うかひ奉る。 質素なる御かまへ。 かしこくもかたじけなし。 とこしへに、民
安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大神。 御製。

準備

- 一 第一課 御殿の挿畫 擴大畫。

教授

- 一 第一課 皇大神宮 達讀。
- 二 第二課 第一節 神苑 達讀。
- 三 主要語句を板書しつゝ、話述若くは設問に由り、意義を與ふ。
 - 1 「老木枝をまじへて、高く天をつく。」(板書)
古く老いた、木と木とが、互に枝をまじへてをる。これは木のどんな様子をいつたのか。

(枝が茂つてゐる様子。)

「高く天をつく。」とはどんな様子をいつたのか。(木が高くのびてゐる様子。)

三十年か五十年もたてば、そんな大きな木になるか。(百年も千年もた、ねばそんなにはならぬ。) そんなに老木が茂つて、晝なほ暗い様な所に行くと、どんな氣持がするか。(何だかしんとする。) そんなに、人の氣をしんとさせる様子を、「神々しい。」といふのである。

- 2 「神々しさいはん方なし。」(板書)

- 3 五十鈴川の水はどんなであつたか。(清らか。)

「口をすすぎ、手を洗ふ。」(板書)

その清らかな水で、口をすすぎ、手を洗ふといふどんな心持で有う。(心持がよい。)

神々しい様子を見て、心はしんとする。又清らかな水で、口をすすぎ、手を洗つて、氣分は生々する。かくて御神殿を拜してこそ、其の勿體なさを、深く感ずる事が出来るのである。

- 4 質素なる御かまへ。(板書)

質素とは派手の反對で飾りのない機子の事である。構とは家の組立て、用意の事である。身分の卑しいものが、派手な奢つた風をしてゐるのを見ると、どんな感じがするか。

身分の尊い方が、質素な風をして、いらつしやると、どんな感じがする。

日本一の尊い神様は、伊勢の神宮である。すると、伊勢神宮は、日本一の派手な、奇麗な、御神殿であるのが當然である。然るに、実際は何の御かざりもなく、至つて質素な御構である。此の質素なる御構が、皇祖天照大神の御思召に叶はせらるゝのであるかと思へば、實に恐れ多く、勿體なく思はるゝのである。

5 第一課挿畫觀察。

6 「御製。」「とこしへに、民安かれといのるなる、我が世を守れ、伊勢の大神。」〔板書〕

御製とは、天皇陛下の御詠み遊ばしたる御歌といふ意味である。「とこしへに……」は、即ち今上天皇陛下の御製である。

「とこしへに……」の御製は、「いつくまでも、日本の國民が心安く暮すことが出来る様に、我が世をお守り下さいませ。伊勢の大神様に、おいのり申上げます。」との大御心を詠ませ給ふた御歌である。天日の如き御仁徳の高き皇祖は、此の大御心をお聞き遊ばして、如何に嬉しく思召すで有う。

四 右板書反覆熟讀。視寫。

五 語句の應用として、左記の聽寫を課す。

- 1 老木枝をまじへて晝なほ暗し。その神々しき様。心おのづとしんとする。
- 2 りつばな御かまへ。質素な身なり。

第三時

要目

- 一 第二節 神殿。(七頁四行迄。)讀方。
 - 1 前教授事項を基本觀念として、反覆熟讀せしめ、成るべく自動的に理解せしめん事を期す。
- 二 文字 頂。千。
- 三 語句 數千年も經たらん。 かつを木。 千木。 うちちがへ。 國體。 いよいよ身にしみておぼゆ。

準備

- 一 第一課御神殿の挿畫擴大畫。

教授

- 一 挿畫觀察に由り、左記の語句を理解せしむ。
 - 1 「神殿の御屋根。」扉の内に御屋根の見ゆるは、即ち御神殿である。

2 「千木。」屋根の兩端にうちがへたのが千木といふものである。

3 「かつを木。」御屋根の上に、圓く長さ木が并べてある。これが「かつを木。」である。

二 第一節 達讀。

三 第二節 朗讀。

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 境内にはどんな老木があるか。(何千年もたつたで有うと思はれるほどの老木がある。)

2 神殿はどこから拜むのであるか。(玉垣御門の前で、拜み奉るのである。)

3 玉垣御門までに、どんな建物の前を通るか。(神樂殿。御馬屋。板垣御門。)

4 神殿の御屋根は何でふいてあるか。(かやぶきである。)

5 神殿の御かざりは何であるか。(千木かつを木等に、金色の金物が打つてある。)

6 材は何が用ひてあるか。(ひの木、白木が用ひてある。)

五 第二節 達讀。

六 「國體のたふとさ……」の意義につき、左記の設問及び語述を行ふ。

1 質素なる御構がかへつてどんなに感ぜらるゝか。

2 「とこしへに民安かれ……」の御趣旨を話してごらん。

3 廣い世界中に、日本の様なよい國體はない。國の初より、代々の天皇皆國民を、子の如くに、愛し給ふ。こんな有難い國はない。といふ事は、誰も承知の事であるが、質素なる神殿を拜むにつけ。天皇陛下の此のかたじけなき大御心を思ひ出して、尙更國體の尊い事が身にしみ、何となく、恐ろしい様な、嬉しい様な、悲しい様な、生々する様な、何とも言へぬ心持がしたといふ意義である。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

1 今一週間もへたらんには、病氣はなほるならん。

數十年もへたらんかと思はるゝ大きな鯉、池の中をおよぎまはる。

2 この氏神様の鳥居の前を通るたびに、僕の病氣を心配して、雨の日も、風の日も、日參せられし母の事を思ひ出でて、親の恩のありがたさ、身にしみておぼゆ。

第四時

要目

一 第三節 外宮。(七頁六行迄。)讀方。

二 第四節 年來のゝぞみ。(終迄。)讀方。

- 三 文字 外、幸、
- 四 語句 年來の、ぞみを達す。何等の幸ぞや。
- 五 全文 達讀。

準備

- 一 外宮の御有様の掛圖。

教授

- 一 第一、二節 達讀。
- 二 第三、四節 朗讀。(新出文字は兒童の質問をまちて摘書教授す。)
- 三 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。
 - 1 内宮とは何の社を申奉るのであるか、想像して答へてごらん。(皇大神宮。)
 - 2 勅使とはどんな事であるか。(天皇陛下の御使者。)
 - 3 なぜ勅使の参拜があるのか。(今日は神嘗祭であるから。)
 - 4 勅使の参拜のあるのは、神嘗祭に限るのか。(新嘗祭春季皇靈祭……等にも勅使の参拜がある。その事は、どこかに書いてあつたか。(第一課三頁三行に書いてある。))
 - 5 「年來の、ぞみを達す。」とは、何年も前からかうしたいと思つてゐたその事をしとげること

をいふのである。

「何等の幸ぞや。」とは、どうした仕合せな事であるかといふことである。

なぜそんなに仕合せであると思ふのか。(年來の、ぞみを達したから。)

それだけではないまだ外にある。(勅使の参拜のある、此の日に望を達したのであるから。)

四 第三、四節 達讀。

五 全文 達讀。

六 文章の用意につき、左記の設問及話述を行ふ。

- 1 本課は参宮日記の一節ではあるが、文章中重だちたる記事につきていふ時は、何といふ題目をつけてよいか。(皇大神宮。)
- 2 第一節は皇大神宮の何の事が書いてあるのか。(神苑。)
- 第二節は……(神殿。)
- 3 第三節は外宮の記事である、外宮の神殿の御有様は、およそ内宮に同じ事であるから、どうでかうでと、一々書いてない。同じ様な事を重ねて書くと、文章に面白味がなくなるからである。
- 4 第四節は、自分の感じた事を書いて、全文の結びとした。文章を書く上に記憶しておかねば

ならぬ事である。

七 全文 達讀。

第五時

要目

一 第一課第二課 復習。

教授

一 第一課第二課 達讀。

二 語句の應用。

- 1 かくばかりうれしきことはなし。
- 2 きはめてかなしきこと。深くかはいがる。あつくお禮を申す。
- 3 重だちたる事がら。大切なる事。大事。
- 4 うららかな天氣。清らかな水。すゝやかなけしき。にぎやかな町。
- 5 老木。古木。老人。戦利品。ふんどり品。
- 6 年來ののぞみ。日ごろのねがひ。前からのおもはく。

7 あがむ。たふとぶ。たふとき。うやまふ。

三 語句の聽寫。

- 1 一生。一代。一度。神勅。勅使。勅語。造る。作る。板垣。石垣。
- 2 告げ知らせる。授けたまふ。告げたまふ。
- 3 祭日、祝日、天長節の式、式日、日の丸の旗。

第三 たけがり (三時間)

形式

一 文章 韻文 五七調に七七調を交ふ。

第一節 ともよき日や。

天高く氣清き秋の空。心引立ち身締り。老人病者ならでは、家庭の小天氣に安心せず。まして、意氣旺盛の健脚男兒。うたゝ脾肉の感に堪えざらしむ。
かゝる好季節を紹介する所以のものは、やがてたけがりの遊を呼起さんとする前提なり。

第二節 きのこたづねん。

此の好季節。言合はさねど。心に畫く山遊び。人も我も皆一つ。
ある一人の首唱者、只一聲で集り來る同志の友。
僅かに三句なれども、友を呼ぶ様、應ふる聲、實際を耳にするが如し。

第三節

きのこにはほへり。
ふんと、鼻につくきのこの香。氣愈勇み 足益輕し。山深くたどり行く山路細道も
坦路に異ならず。

第四節

まづ見つけつと高く呼ぶ歡聲は、無意識なり。其の時の愉快は何とも言へず。

第五節

えもの數へん。
獲物に多少大小の相違こそあれ、「これはどこで、どんなに。」などと、一々説明付
の獲物を比べんこと、眞に愉快なり。

二 文字

路(足届に各。) 呼

語句 すみわたる。(澄渡る。くもりとれて明かになる。さえわたる。さえさる。) さても。(さ
てさて。さてまあ。) いざ。(人を誘ふ時、又は何事か仕始めんとする時に發する聲。さあ。
どれ。どりや。) たどる。(辿。不案内なる道に迷ひながら、尋ね行く。) 見つけつ。(「つ。」「

は、半過去をあらはす助動詞。) やまびこ。(山彦。山響。こだま。山谷などにて、聲音の
返響すること。) いでや。(「いで。」は人を促す時、又は相手に對して、競ふ時などにい
ふ聲。「や。」は感詞。) いさを。(善良なる成績。名譽ある成功。てがら。こうせき。い
さをし。)

各節共に、第二句第三句は、漸層の詞姿を用ふ。語句の思想を、次第に強く高く大きく按
排する詞姿にして、他を勧誘し、他を説得するに、適切なる修辭法なり。例せば、「風暖
にさてもよき日や」と説きて先づ相手の意を引き、更に「山遊びするによき日や。」の句を
重ねて、益々相手の心を動さんとするが如し。

又本文は所々に倒裝法の詞姿を用ふ。高き感情を表はし、語調を強むる場合に用ふ。例せ
ば、感情の平靜なる場合には、「手かごを持つて來給へ。」といふべきを、感情高まり意氣
促進せる場合には、「手かごを持つて。」など、いふべき暇を有せず、直ちに「來給へ。」の
語を以て、結局の意志を發表し、然る後に、前に遡つて、補足の文を繼ぐが如し。

内容

田園生活の趣味を與ふるを以て目的とす。

教授

横断的排列法に由り、左記の三教時に分つ。



第一時 範讀及び話述に由り、全文の要領を授く。

第二時 全文の讀方及び話述に由り、趣味を與ふ。

第三時 既教の讀方を復習し、更に語句の吟味に及ぶ。

第一時

要目

一 全文の要領。

教授

一 左記の話述に由り、既教の田園生活の趣味を喚起す。

自然の美は田舎である。見るもの、聞くもの、一年を通じて、吾人を喜ばしむるもの、多きは田舎である。

「道をはさんで、島一面に、麥は穂が出る菜は花ざかり。」此の春の景色は、言ふに及ばず。夏の夕方、螢を追つかけまはるも、實に愉快である。

然らば、此頃の愉快はどんな事であるか。廣い田圃に、黄金の波を打たせてをる豊年の様。如何にも、嬉しさうに、にこ〜してをる農夫の顔。家のめぐりに、今にも枝が折れんばかりに、赤く熟せる柿の木。林へ行けば栗の實椎の實。至る所に、吾人を歓迎してをる。中でも、殊に愉快なのはたけがりの遊。

此の愉快なたけがりの遊につき、面白い韻文が書いてある。

二 範讀 一回

- 1 身自ら書中の人となり、實際たけがりの境遇にある心もて、巧妙なる範讀を與ふべし。
- 2 右巧妙なる範讀に由り、兒童をして、無意識中に教師に感染せしむ。

三 左記の筋書に由り、本文の大意を話述す。

- 1 (たけがりによい天氣。)もうじつとして、家に居られない。
- 2 (友だちをさそふ。)太郎さんも友吉さんも正雄さんも直ちに賛成。
- 3 (行くみちくさのこにはふ。)早やまつたけをとつた心地。
- 4 (見つけた時のうれしさ。)思はず嬉しい聲を出す。
- 5 (とつたまつたけを數へる。)家にかへる仕度。

四 範讀 數回

- 1 二の範讀に由り、無意識的に趣味の感染をはかり、三の話述に由り、幾分か意識的の理解を加へ、更に範讀を以て、趣味を與ふ。

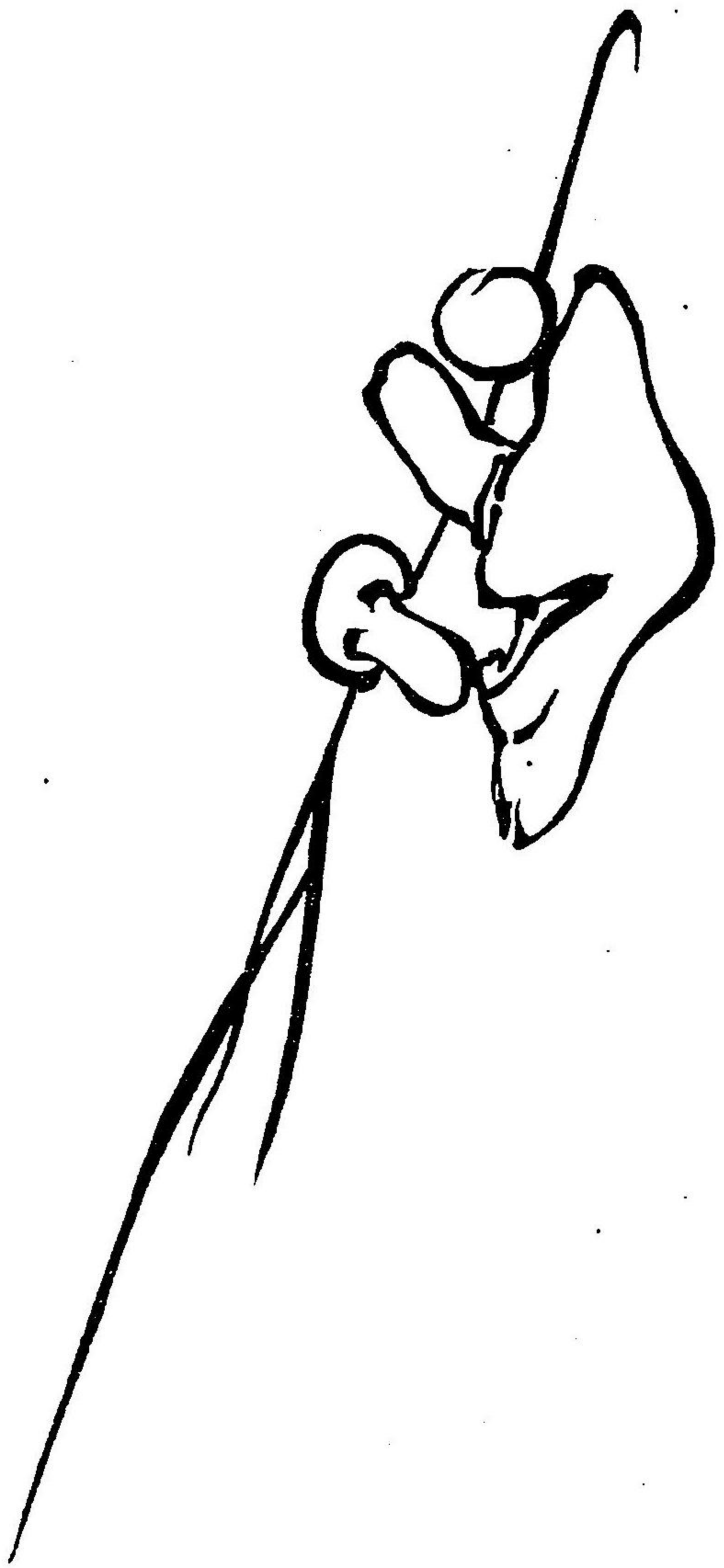
五 朗讀 反覆熟讀。

六 達讀。

第二時

要目

- 一 話述を主とし、本文の趣味を感得せしめんことを期す。
文章に拘泥せず、成るべく、面白く、快活に、話述を行ひ、兒童をして、話中の人たらしめんことを圖るべし。



教授

一 範讀

二 達讀

三 話述

1 秋の空。

けふは近頃のないよい天氣である。空は澄みわたり、暖い心地のよい風が、そよ／＼と吹いて来る。暖いとはいへ、春の暖さとは違つて、身がしまり、心が引立つて、何となく生ずる。こんな天氣には、家のめぐりなどに、愚圖ついでをすることは出来ぬ。思ひ出すのは山遊び。その山遊びの中でも。

2 友を誘ふ。

いくら茸狩でも、一人では面白くない。誰かよい友達れば、「太郎さんも、正雄さんも、もうおさらひが濟んだで有う。まあ近い正雄さんを誘つて見よう。」手かごを提げて出かけた。

「木村君、来たまへ。籠をもつて、たけがりに行かう。」

「僕も今君を誘ひに行かうとしてゐた所。」

「君待つてゐたまへ、大山君を誘つて来るから。」

3 行く道々。

木陰を通り、がけに出で、荊や野草の埋めてをる山道、右へ左へと曲り曲つた細路、「けふ

は僕が一番だね。」「いや僕が佐々木高綱。」「なわに君達に負けるものか。」「まあ僕の腕前を見たまへ。」などと、無邪氣なる自慢話。たとひ松茸の獲物はないにもせよ。愉快なる獲物は、既に此の道行の間にたつぷりと存してをる。

その中に、松林に近づく。そよ／＼と吹いて来る山風。きのこの香はぶんと鼻に。あ、よい香。」「此の松林こそ僕の腕前をだ。」「宇治川宇治川。」

4 見つけたぞ。

各思ひ／＼に、松林の中へはいつた。功名手柄の氣に勇む三人。息をこらして、一生懸命。がさ／＼と、木の葉を搔きわける音の外、あたり静かである。

やがて、向ふの松の木陰から、高く叫ぶ聲。「宇治川の先陣佐々木高綱。」續いて叫ぶ聲。「見つけた／＼、一時に二本。」互に喜ぶ其の聲は谷に響いて、ワ……………。

5 えものくらべ。

日は西に傾いた。岩の小かけに、獲物をひろげた。

「僕が佐々木高綱。」

「早く見つけても数が少い。遅くとも、数の多いのは僕が一番。金鶏勳章は僕のもの。」

「大きい事に於ては功一級。」

6 田舎の秋。

こんな楽しい事は、田舎でなくてはなない。あ、田舎く。田舎へ行つて見たい。

四 達讀 前の話述に由り、身自ら茸狩をなしつつ、あるかの如き思を以て、朗讀せしむる事肝要なり。

第三時

要目

一 既教の讀方を復習し、更に語句の吟味に及ぶ。

教授

一 全文達讀。

二 文章構成につき、左記の吟味を行ふ。

- 1 本文は何節より成るか。(五節。)
- 2 第一節は何の事が書いてあるか。(天氣のよい事。)
- 3 第二節は……。(たけがりにさそひに行つた事。)
- 4 第三節は……。(たけがりに行く道々の事。)
- 5 第四節は……。(まつたけを見つけて喜ぶ事。)

6 第五節は……。(とつたまつたけの数をくらべる事。)

7 本文中より語句を選出して、右内容に適當せる題目をつけてごらん。

(第一節 さてもよき日や。)(第二節 さのこたづねん。)(第三節 さのこにはへり。)

(第四節 見つけつと呼ぶ聲。)(第五節 えもの數へん。)

三 右題目を指示して、達讀せしむ。

四 範講(必要なる語句につき、一例を示す)

- 1 「秋の日の空すみわたり。」霞もかゝらず、雲もなく拭ふた様に、澄みわたり、匠へきつた空。
- 2 「さてもよき日や。」さてもまあよい日であるなあ。
- 3 「友よ、來よ、手かごを持ちて。」誰さんも來給へ。彼さんも來給へ。手籠を持つて來給へ。
- 4 「たどり行く細道づたひ。」有るか無きかといふ様な山路、足もとで探りながら行く。蟻の往來ともいふべき細路をつたひながら行く。
- 5 「うれし、この松の根もとに、まづ見つけつ。」嬉しいな。この松の根もとに見つけたぞ。まあ一本見つけたぞ。
- 6 「やまびこにひびく呼聲。」喜ぶ聲が、向ふの谷に、ワワ、と響く。
- 7 「いでや、あの岩の小かげに。」さああの岩の小かげで。

五 語句の書取、及び應用。
8 「いさをくらべん。」誰が一番澤山とつたか。一番の手柄は誰か。手柄比べををしよ。

- 1 池の水すみわたる。よくさえた空。
- 2 さてもみごとなまつたけ。りつばなまつたけ。
- 3 行け行け。急いで行け。おくれぬやうに。
- 4 いざ本を讀まん。いでやめづらしきもの見せん。
- 5 日は暮れたり、月はいまだ出でず、わづかに星の光をたよりに、たどり行く。
- 6 山路、細路、ありのみち。
- 7 高く呼ぶ聲、やまびこにひびく。

第四 寫眞をおくる手紙

形式

一 文章 書簡文

書簡文の中にも、智解的と情解的との二種あり。本文は即ち乙に屬す、濃かなる情誼の交際に於ける書簡文なり。

されば本教授に於ては、智解的のもの、即ち商用文若くは報知文等と、用語文體等に於て大に趣を異にせる事を悟らしめん事を要す。

第一節 寫眞をおくる手紙。

「うつもにこ〜。」「よそ行の顔。」「伯母様お笑ひになつてはいけませんよ。」等の用語は 血統の間柄。情誼の濃かなる様を隈なく寫し出せり。

第二節 同じく返事。

用語の注意前に同じ。

二 文字

寫^{ウツス}。(音讀寫^{シヤ}) 既教。(過^{スギ}) 伯母^{ヲバ}。(訓讀母音讀母 既教。) 返^{ヘン}。實^{ジツ}。(訓讀實。冠^{クラウン}に貫^{クワン}) 既教。(髮^{カミ}) 參^{マセル}。(音讀參^{サン}) 既教。

三 語句

ついで。(序。よき折。よき都合。よき便。)にこ〜。(莞爾さも嬉しさうなる顔つき。)まじめ。(眞面目。本氣なる顔色。精神をこめたるおも、ち。)うつかり。(茫然として、心のぞらなる様。)そつくり。(そのまゝ。わりのまゝ。)

内容

- 一 親類の交際につき、左記の觀念を與ふ。
- 1 吉事の慶祝凶事の弔慰は、勿論、年始の禮。季節の見舞等をおろそかにすべからず。
- 2 交際の要は誠にあり。誠の伴はざるものは虚禮なり。
- 3 心はたゞちに形に表はる。直接の應對は言ふに及ばず、手紙の上にも、自然と表はるゝものと知るべし。

教授

- 一 縦斷的排列に由り、左記の三教時に分つ。
- 第一時 寫眞をおくる手紙。讀方。
- 第二時 同じく返事。讀方。

第三時 全課。復習。

第一時

要目

- 一 第一節 寫眞をおくる手紙。讀方。
 - 1 最も近き親屬關係のあるお春と伯母。濃やかなる情誼をこめたる手紙。遠慮なく、躊躇なく自己の思想を發表して、しかも禮節を失はざるところ大に趣味あり。
- 右の趣味を感得せしめ、形式につき、綴り方の素地を與ふることは、本教授の主なる目的なり。

二 文字 寫す。過ぎ。伯母。

準備

- 一 本文を半切に清書し、封筒に挿入して、實際の手紙の形式を具へたるもの。

教授

- 一 範讀
- 1 範讀に先だち、準備の手紙を示しつゝ、左記の話を進行。



Dr. Nishikawa - the man

こゝにこんな手紙がある。表には、「伯母上様。」「はな。」と書いてある。中にはどんな事が書いてあるか。

2 右の話を承け、或人の實際往復せる手紙を讀むが如き態度にて範讀す。

(注意) 本教授には、別に改まりたる目的指示を要せず、右準備の手紙を、實際らしく、範讀するもの、即ち目的指示の代用なり。兒童の注意を集中する上よりいへば、奇警法の原理に基づける一種の目的指示なり。

3 故に教授の範讀は、兒童をして、専ら聴かしむるに止め、文章を視せしむるを要せず、たゞ聴く事のみによりて、文章の大意を理解せしめん事を期す。

二 右範讀に由りて、與へたる理解につき、左記の設問を行ふ。

- 1 誰から誰におくつた手紙であるか。(お春から、伯母様におくつた手紙。)
- 2 手紙に書いてある用事の主なるものを簡単にいふと。(寫眞をおくる時につけてやる手紙。)
- 3 此の手紙の文の中、最も愉快に面白く聞いた言葉は。(三郎はいつもにこ〜として。まじめになり過ぎました。よそ行の顔。伯母様笑つてはいけませんよ……。)
- 4 親しくなつかしく思ふ姪のお春から、こんな頼もしい手紙を受取つた伯母は、これを讀んでどんな心持がするで有う。

5 此の手紙はよほど上手に出来てをる。讀んで心地よく、聞いて心地がよい。

三 範讀數回。聴かしむるのみなる事一に同じ。

四 右範讀に由りて與へたる理解につき、設問を行ふ。

- 1 寫眞を幾枚おくつたか。(二枚。)
- 2 どんな寫眞を。(みなと一しよに寫したのと。自分一人で寫したのと。)
- 3 自分の寫眞はどちらがうまく寫つてゐたのか。(自分一人で寫した方が。)

五 讀本に由り、默讀。音讀。達讀。

六 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 自分一人の寫眞はついでに寫した。何のついでに。(みんなと一しよに寫すついでに。)
- 2 みんなと一しよに寫したのは。(わざわざ寫したのである。)
- 3 なぜわざわざ寫したのか。(にいさんが歸つて來たから。)
- 4 お春の寫眞は二枚の内どちらがうまく寫つたのか。(自分一人で寫した方が。)
- 5 みなと一しよに寫した方は、なぜまづくなつたのか。(まじめになり過ぎたから。)
- 6 一人の方は。(うつかりしてゐる間に、寫されたので、却つてよく寫つたのである。)

七 達讀。

八 左記の語句を聴寫せしむ。

- 1 寫真でも笑つて寫つてゐます。
- 2 まじめになり過ぎました。
- 3 よそ行の顔。
- 4 かへつてよく寫りました。
- 5 伯母様お笑ひになつてはいけませんよ。

第二時

要目

- 一 第二節 同しく返事。讀方。
- 1 親愛の情操を養ふ事、形式につき綴り方の素地を與ふる事、前教時に同じ。
- 二 文字 返。 實。 髮。 參。
- 三 語句 なるほど。 そつくり。

教授

一 第一節 達讀。

二 左記の話を以て、第二節の讀方に導く。

1 なつかしく思ふお花から、手紙をよこした。伯母は早速開いて見た。ところが、此の通り愛嬌のある手紙。

「しばらく見ないうちに、花ちゃんは、大そう字が上手になつた。文もよく出来てをる。よそ行の顔。おもしろい事が書いてある。」

などと、にこ〜顔で、褒めたり、笑つたりしながら、讀んでしまつた。

今度は寫真を出して見た。まづみんな一しよに寫した方を手にとつた。

「まわ〜、みんな揃つて元氣のよい顔して、これが三郎さん。ほんとに、可愛らしく寫つてをる事。なる程、お花さんも、次郎さんも、少しまじめになつてゐるやうだ。」

今度は、お花が一人で寫してゐるのを手にとつて、

「これはよくとれてゐる。しばらく見ないうちに、髪がこんなに綺麗になつてゐる。段々おかわさんに似て来る。おかわさんの小さい時分に、そつくりである。」

伯母はこんなにして、あちらを見たり、こちらを見たり、また見比べたりして、楽しんでゐたが思ひ出した様に、

「寫真を見て、急に皆の顔が見たくなつた。その内に暇を見て行くことにしやう。」

といつた。やがて硬箱を出して、返事の手紙を書いた。どんな事を書いたか。

五二



手紙は自分の心にある事を、先方の人に、快く受取れる様に書くのが上手といふものである。

すると、伯母の手紙には、どんな事が書いてあるか想像が出来る。

三 右の話を承け、適宜の設問を以て、左記の語句を聴寫せしむ。

- 1 御寫眞をありがたう。
- 2 三郎さんは、ほんとにかはいらしい。
- 3 おはなさんも、次郎さんも、少しまじめになつてゐる。
- 4 かみが、大そうきれいになつた。おかあさんの小さい時分にそつくり。
- 5 寫眞を見て、急に皆さんにお目にかゝりたくなつた。
- 6 その内まゐりませう。

四 第二節 黙讀。音讀。達讀。

1 讀本の文章は、二の叙述に於ける伯母の手紙を轉寫せるものなりとの心を持たしむる事、肝要なり。

2 新出文字。返實髮參は、二の叙述、三の設問に由り、推讀せしむべし。

第三時

要目

一 全文復習。

一 第一節 達讀。

二 第二節 達讀。

三 左記の文字及び語句を聴寫せしむ。

- 1 寫眞を寫す。ね過ぎた。返事の手紙。實にうれしい。黒い髪。參る。參上。參拜。
- 2 差上げます。そつくり。そのまゝ。

四 全文視寫。

- 1 第一教時準備の半切書を模範として、半切に書かしむ。
- 2 封筒に挿入し、郵便に差出し得るまでに仕上げしむ。
- 3 寫眞を郵便にて送る形式を知らしむ。

第五 働クコトハ人ノ本分

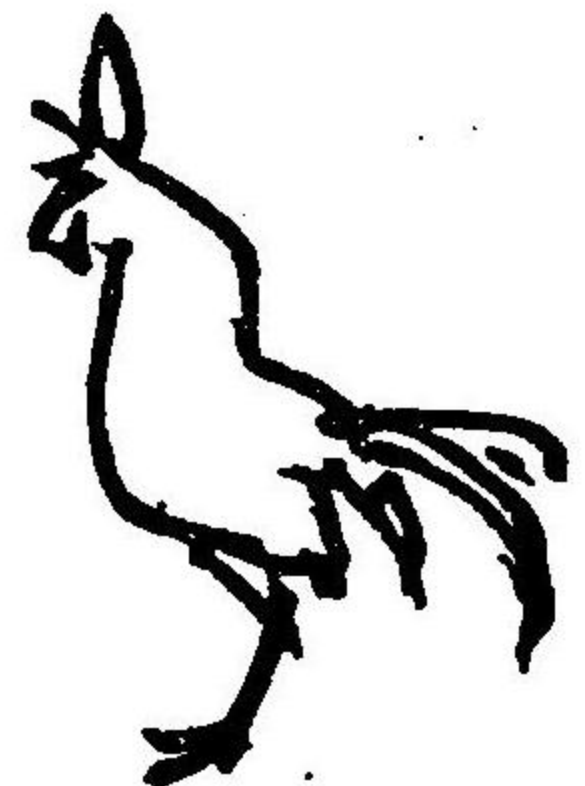
(三時間)

形式

一 文章 記體的説明文 後括式

第一段 記體文

農夫職人生徒兵士會社員等、各自職務に就かんとする朝の有様を記述す。これやがて第二段に於ける「人の本分。」を説明せんとする前提なり。文章はすべて短句を以て成る。せつせと働ける忙しき様を表はすに、必要なる形式なり。



第一節 ニハトリガ度々鳴イテ。(十二頁八行迄。)

第二節 母ハ臺所デ。(十四頁四行迄。)

第三節 大工ハノコギリ。(十四頁八行迄。)

第四節 學校デハモウ授業ガ。(十二頁三行迄。)

第二段 議論文。

第一段の記體文を例證とし、前提として、「働クコトハ人ノ本分ナリ。」との斷定を下し、以て全文を統括す。

二 文字

- 働(働) 既教。
- 飯(既教の食) 反に分解。
- 牛(訓讀ウシ既教) 乳 具(類字貝) 既
- 授(授) 授(訓讀) 授(既教) 務 練 職(耳音戈に分解) 幸(訓讀サイハヒ既教) 却

ネドコヲハナレタ。(寢床を離れた。「起くる。」といふ事を具體的に表はしたるもの。) シタ
ク。(支度。準備。用意。) ソレド。(其れには其れ、此れには此れと、附隨すべき、物件
を意味す。) メイメイ。(銘々。おのゝ。それぐ。) 授業。事務。練兵場。幸福。
(運命の吉なる事。遭遇のはえある事。さしはひ。しはあせ。) 本分。(分際として、盡さ
ざるべからざる責任。即ち道德上の義務。)

内 容

一 左記の事項につき、人は働くべき本分あることを知らしむ。

1 人の幸福は皆自分の働に由つて産み出す。

2 學生は學課につき、全力を注ぐべし。

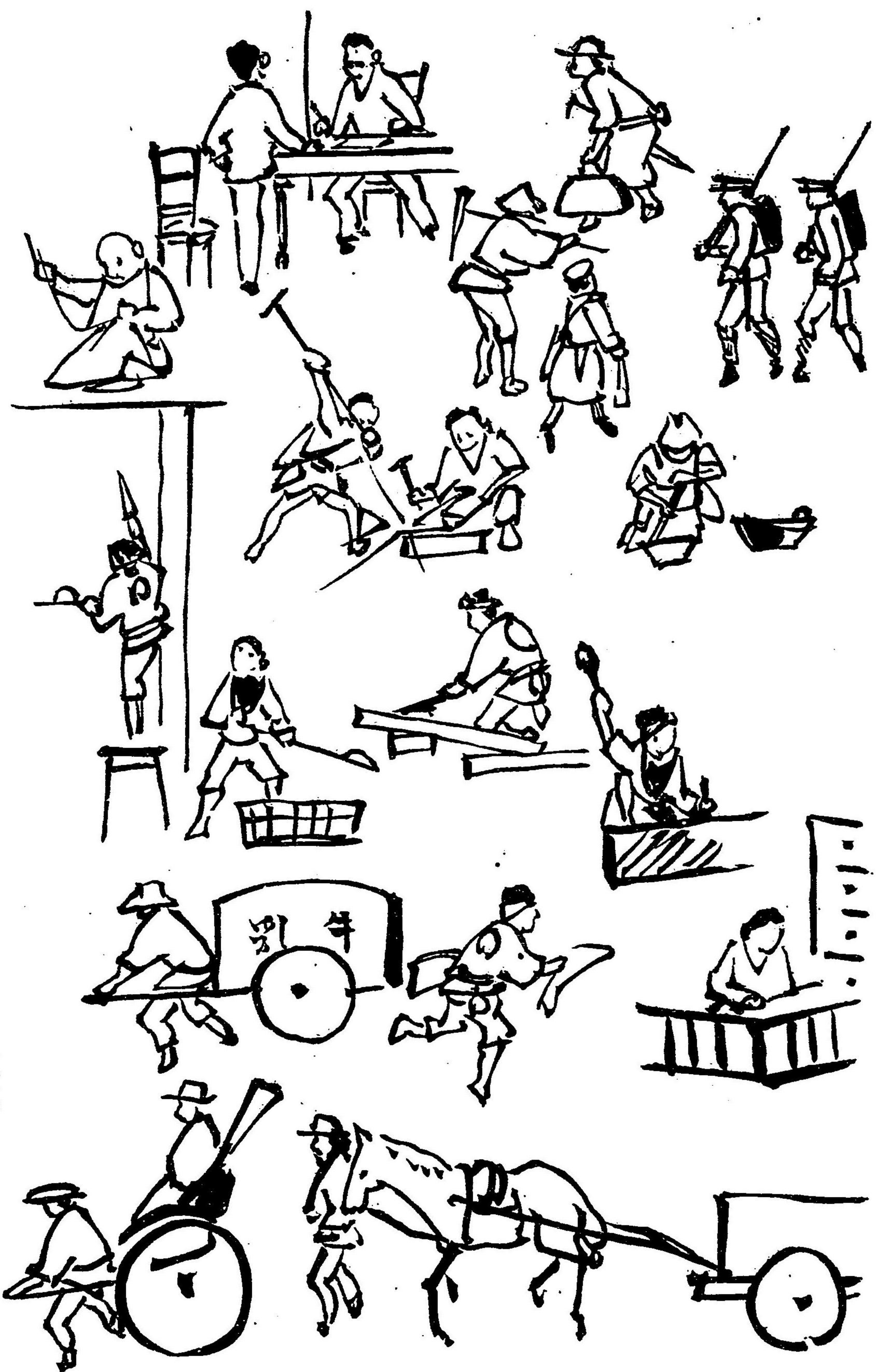
教 授

一 縦斷的排列法に由り、左記の三教時に分つ。

第一時 第一段。メイノ仕事ニカ、ルサマ。讀方。

第二時 第二段。働クコトハ人ノ本分。讀方。

第三時 全文 復習。



第一時

五八

要目

一 第一段 (十五頁三行迄。) 讀方

1 文に修飾なく、平易簡單なる句を、無雜作に、連絡し、以て各自其の本分たる職務に就くべく、急ぎつゝある様を記述す。此の平易簡單無雜作なる連絡は、即ち一種の修飾法なり。文章の用意かくの如し。随つて、本文の朗讀は、較急促なるを要す。緩漫なるべからず。

二 文字 働 飯 牛乳 具 授 務 練

三 語句 ネドコヲハナル シタク ソレハ メイハ 事務

教授

一 左記の設問に由り、朝に對する舊觀念を喚起す。

- 1 皆さんの宅で、一番早起をなさるのは誰か。(母。) 何をなさるか。(朝飯の用意。)
- 2 夜がまだ明けてゐないうちから、人の通る聲も、馬の足音も車の響も聞える。しかし、それがだんだん賑やかになるのは、何時頃からであるか。其の聲を聞いて、床の中に寝てゐる氣になれるか。

- 3 あゝ眠い。今少し寝てゐようと思つてゐても、「さあ早く起きなさい。遅刻をしてはいけませんよ。」と、毎朝方々の朝寢坊を起して廻る人がある。誰であらう。(新聞配達。牛乳配達。)
- 4 朝飯は済んだが、まだ學校へ行くに、少し間があるといふ頃に、早や仕事場へ急いで行く人がある。どんな人か。(大工。左官。……)

二 第一段 範讀

三 第一段 朗讀

四 左記の設問若くは話述に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 範讀を聞き、又自分で朗讀する間に、何だか變つた氣がしないか。急がしい様な氣持はしないか。今一度範讀するから聞いてもらん。皆さんも朗讀してもらん。
- 2 朝のうちでも、一番早い時分の事の書いてあるのは第何節であるか。(第一節。)
- 3 第二節の文章の書出しは何であるか。(母ハ臺所デ。)

此の書出の句を題目とする。此の題目を記憶してをれば、自然に本文の大意を記憶する事が出来る。母が臺所で……といへば、父は……であるを書いてある。母には父が對偶である。梅といへば、鶯といふ様なものである。

家の内の様子は、父と母とで済んだ。内といへば外。外の様子はどうである。人といへば車。

車とらへば馬。

そのうちに、新聞屋が「新聞。」と聲をかけて、投入れる。新聞屋といへば、朝早く配達する事に於て、同類の牛乳屋を擧げる。

4 第三節も第二節と同様に、書出しの句を以て題目とすると面白い。その面白いところを考へておらん。

5 第四節も同様である。

五 第一段 達讀

第二時

要目

一 第二段 (終迄) 讀方

1 第二段は本課の主要部なり。第一段は第二段の意見を述べんが爲めの豫備とし、例證として、記述せしものなり。

第二段を組成せる各句の中。特に神髓となるべきものは、最後の斷定、「働クコトハ人ノ本分デアル。」の句なり。本課の題目として、此の句を擧げたるは道理なり。これに亞ぎて、

主要なるは、「人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ出ス外ハナイ。」の句なり。

二 文字 職 幸 部

三 語句 幸福 本分

教授

一 第一段 達讀

二 左記の語述若くは設問に由り、主要語句の教授を行ふ。

1 大工、左官石屋に農夫會社員に軍人等、めいめい、朝早くから働く。働くのは何の爲であるか。働かない人の最後はどうなるか。幸福を得たいと思ふ人は、どうしたらよいか。

「人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ出スデアル。」(板書)

これと同じ意味の句がある。「勉強は幸福を産む母。」といふ句がある。幸福は自然に湧いて來るものでも、降つて來るものでもない。働くといふ種。勉強といふ母が産むのである。

此の種を蒔かず、此の母を持たない人は、不幸といふ惡魔に襲はれる。襲はれて難儀する人は、自業自得である。しかし、それだけでは濟まない。他人にまで迷惑をかける事となる。

2 「働クコトハ人ノ本分デアル。」(板書)

前に言つた通り、働く働かぬとは、自分の不幸だけでなく、他人にまで迷惑をかける事と

なれば、自分の勝手に、働く働かぬを決定する事は出来ぬ。人と生れて来た以上は、どうしても働かずにゐる譯にはゆかぬ。働くといふ事は人の務である、人の道である。

「本分。」といふのは、即ち人の務、人の道といふ意味である。

ところが、世の中には、此の大切な務を忘れ、道を怠る人がある。それは働くのを大層苦しい事に思つて、恐れてゐるのであるが、其の實、働くよりは、遊んでばかり居る方が、却つて苦しいといふ事を知らない人である。實に憫むべき人である。

三 第二段 範讀 範講

四 第二段 朗讀

五 左記の設問に由り、本文の理解を確實にす。

- 1 第二段の文章中、最も主要なる句は何か。(働クコトハ人ノ本分デアル。)
- 2 次に主要なる句は……。(人ノ幸福ハ皆自分ノ働デ産ミ出ス外ハナイ。)
- 3 なぜ働く事が人の本分であるか。(働かぬと、自分も不幸を受け、他人までも迷惑をかけるから。)
- 4 人の本分を忘れる人はどうした心得違をしてゐるので有う。(遊ぶ事を樂な事と思つて、其の實苦しいといふ事を知らぬのである。)

六 第二段 達讀

第三時

要目

一 全文 復習

- 1 全文 達讀
- 2 文字及び語句の練習應用

教授

一 全文 達讀

二 適宜の設問法に由り、左記の觀念を與ふ。

- 1 第一段は、觀察せる事實を記述せるもの、即ち記體文なること。
- 2 第二段は、自己の意見を記述せるもの、即ち議論文なること。

三 文字及び語句の應用練習

- 1 朝飯、夕飯、晝飯。職業、職人、職務、幸福、不幸。
- 2 働く人、働かぬ人、具、具。

- 3 牛乳配達。授業がはじまる。練兵場へ行く。
- 4 人の幸福は皆自分の働で産出す。
- 5 働くことは人の本分。

第六 松下禪尼 (四時間)

形式

一 文章 敘事文

- 1 第一節 人手ヲカルニモ及バズ。(十七頁三行張レリ迄。)
- 第二節 若キ者ニ知ラセン。(十八頁五行答ヘタリトゾ迄。)
- 第三節 カ、ル母ニ養ハレタル時頼。(終迄。)

二 文字

招。(手扇に召 既教。) 待。(訓讀待 既教。) 得。(弓扇に長 既教。) 給。(糸扇に合 既教。) 若。(草冠に右 既教。類字若 既教。) 正。(音讀正 既教。) 儉。(音讀養 既教。)

三 語句

招待。(まねく。待ち受く。) つくろふ。(續。補ひ修む。修復。手入。) 召使。(召し使ふ人。禁中の卑官。家人。奴婢。) 命ず。(言ひつける。仰せつける。申しつける。) おぼつかなき。(覺束無。判然せず。分明ならず。心もとなし。たしかならず。) 手つき。(手ぶり。) 重ねて。(更に。其の上。) さらば。(然わらば。さあらんには。そんなら。) ことごとく。(のころず。みんな。すつかり。全體。まるさき。) 切張。(障子などの破れたる所のみを切りて張る。) まだら。(斑。曼陀羅。種々の色の疎に入り交りたるもの。ぶち。) 見苦し。(見る目苦し。見にくし。見とも無し。醜陋。) 若きもの。(年若きもの。息子。) 節儉。(節約。つままやか。) をさむ。(治。其所に居え安んず。よる。因る。ちなみす。もとづく。)

教授

- 一 横斷的排列法に由り、左記の四教時に分つ。
 - 第一時 挿畫觀察。大意を理解せしむ。
 - 第二時 話文教授。地文を推敲せしむ。
 - 第三時 全文教授。前二教時の事項を統括す。
 - 第四時 全文復習。

参考

一 北條時頼

康元元年、時頼病に嬰りて難髪し、道崇と法名し、覺了房と號す。嘗て最明寺を山内に創す。是に至り、退去して病を養ひ、男時宗の幼なるを以て、其職を北條長時に委ね。猶軍政に參知す。時頼既に職を解く、諸國の吏或は私を挾みて、民を害する者あらん事を恐れ、陽に遊僧となりて四方に間行し、潜かに風俗を察す、人冤結を抱くれば、就て事情を問ひ、乃ちいふ、我嘗て鎌倉に仕ふ、子の爲に訴へんと、自ら書を作りて、之れに與へて、曰く持して鎌倉に到れと。其の人訴へて、冤遂に解くを得たり。經るの地、察問辨敷して、其の善惡に隨ひ、以て賞罰を行ふ。是に由りて、郡國の守宰、各自ら修飭し、風化厚きに歸し、戸口豊安す。弘長三年卒す。年三十七。時頼深く禪教を信じ、粗々其旨に通ず。宗の僧道隆の爲めに、建長寺を鎌倉に建て、こゝに居らしむ。又畫を嗜み、佛像を畫くに頗る雅趣あり。後深草上皇、使を遣はして喪を弔ふ。諸將士親疎となく、悲哀慟哭して、雜髪する者甚多く、令を諸國の守護に下して、雜髪する者を禁ずるに至る。其の士心を得ること此の如し。性儉素にして、食二味を重ねず。族父宣時と殘齋を嘗めて、對飲せしは、傳へて以て、美談とする所なり。

第一時

要目

一 挿畫觀察。

- 1 障子及び襖等の調度の立派なる事に由りて、高貴の方の居間なることを知らしむ。
 - 2 一人の老婦人障子の破れを繕はんとす。而して、其の婦人は、容貌服裝等に由りて、障子を繕ふが如きわざをなすべき身分にあらざるを知らしむ。
 - 3 障子の枠を表はす太き線に由りて、切張をなせることを知らしむ。
 - 4 座敷の二人は、對座の様子等に由りて、親しき間柄なる事を知らしむ。
 - 5 服裝に由りて、現代の人ならざる事を知らしむ。
- 二 文字 得。 張。 若。 正。 儉。

〔挿畫觀察の後、本文讀方の豫備として、右の新出文字を教授す。〕

準備

一 挿畫擴大畫。

教授

- 一 左記の設問に由り、挿畫を觀察せしむ。
- 1 何が書いてあるか。(年をとつた男の人と女の人。)

- 2 此の二人は、近代の人であるか。(昔の人である。) 何に由つて、其の事を知るか。(服装で知れる。)
 - 3 座敷の様子はどんなであるか。(大そう立派である。) 一番に目立つものは何か。(障子襖。)
 - 4 老婦人は今何をしてゐるか。(障子の破れをつくらつてゐる。)
 - 5 みんな張りかへるのでなくて、繕つてゐるのである事は何で知れるか。
 - 6 こんなに、所々繕ふことを何といふか。(切張。)
 - 7 全く張りかへると、切張とは體裁がどうであるか。(切張は見苦しい。)
 - 8 此の立派な障子に見苦しい、切張は、甚だ不釣合である。(今一つ不釣合な事がある。) 何であるか。
 - 9 (尊い身分の此の老婦人が、障子張をしてゐるのは不釣合である。)
- かゝる不釣合をしてゐるのには、何か譯がありさうだ。二人の對話を聞く事が出来るならば、その譯は分るかも知れん。
- 二 前の設問を承け左記の聽寫をなさしむ。
 - 1 りつばなふすま。されいなしやうじ。たふとい人。
 - 2 とふとひ人が、しやうじの破れをつくらつてゐる。
 - 3 りつばなしやうじに切りばりをしてゐる。

第二二時

- 三 第二教時の讀方の豫備として、左記の語句の讀方及書方を課す。
 - 1 心得のよき人。心の正しい人。節儉。
 - 2 見苦しい。若い人。
 - 3 人を招く。人を招待する。人を待つ。
- ### 要目
- 一 活文を板書して讀方。
 - 二 話文と挿畫とを對照して、地文を推敲せしむ。
 - 三 文字 給。
 - 四 語句 命ず。おぼつかなき手つき。重ねて。ことごとく。
- ### 準備
- 一 挿畫擴大畫。
 - 二 話文板書。

教授

一 挿畫觀察。

- 1 此の座敷につき、不釣合の事が二つあつた。何であるか。
(尊い人が障子張をしてゐると、立派な障子に、見苦しい切張とは不釣合である。)
- 2 かゝる不釣合なることをしてゐるのは、何か譯がありさうだ。二人の對話を聞いたならば、其譯が分るかも知れない。今日は其の對話の讀方を授ける。

二 板書教授。

- 1 「召使ノ中ニ、カ、ル事ヲヨク心得タル者アリ。ソレニ命ジタマヘ。」(板書)
誰が誰に話した文であるか。(男の人が、障子張をしてゐる女の人に。)
- 「カ、ル事。」とは何の事か。(障子張の事。)
- 「命ず」といふのは。(言付ける事。)
- 2 「我モコレ程ノ事ハ心得タリ。人手ヲカルニモ及バズ。」(板書)
誰が誰に話した文であるか。(障子張をしてゐる女の人が、男の人に。)
- 「コレ程ノ事。」とは何の事か。(障子張の事。)
- 「人手ヲカルニモ及バズ。」といふのは。(他の人に張らせるにも及ばないといふ事。)

- 3 「サラバコトトク張カヘ給ヘ。切張ハマダラニナリテ見苦シ。」(板書)
誰が誰に話した文であるか。(男の人が、障子張をしてゐる女の人に。)
- どんなにさせようと思つて言つたのであるか。(みんな張りかへさせようと思つた。)
- 切張はいけないのか。(切張はまたらになつて見苦しいから。)

以上の教授を承けて、左記の話を進行。

老婦人が、身分に不釣合な障子張をしてゐるのを見て、召使のものに命じさせようとした。けれども用ひない。そこで今度は、障子に不釣合な切張を止めようとした。これに對して、老夫人は、其の言葉を用ふるで有うか。

- 4 「我モ後ニハコトトク張リカヘント思ヘドモ、總ベテ物ハ破レタル所ノミックロヒテ用フルトキハ、シバラクハ用ヲナスベキコトヲ、若キ者ニ知ラセントテカクスルナリ。」(板書)
老婦人は男の人の勸める事を用ひたか。(用ひない。)
- すると老婦人は剛情な人であるか。(さうでない。)
- なぜこんな不釣合なる事をするのか。(總べて物は破れたる所のみを用ひて……)

三 以上板書の文章反覆熟讀。

四 左記の語句を視寫せしむ。

- 1 召使に命じたまへ。
- 2 切張はまだらになりて見苦し。
- 3 破れたる所のみをつくるひて用ふ。
- 4 若き者に知らせんとてかくするなり。

第三時

要目

- 一 全文讀方。

教授

- 一 第二教時の話文復習。
 - 1 板書の話文朗讀。
 - 2 適宜の設問を設け、地文の大意を推敲せしむ。
- 二 範讀。(十八頁五行答へタリトゾ迄。)
- 三 反覆熟讀。
- 四 挿畫につき、左記の設問を行ふ。

1 老婦人の名は何といふか。(松下禪尼。) 男の人の名は。(義景。)
二人の間柄は。(義景は禪尼の兄。)

2 「若キモノニ知ラセン。」此の若きものとは誰の事か。(北條時頼のこと。)

3 此の座敷の立派でありしも道理、名高き北條時頼の母の松下禪尼の住宅である。北條といへば、當時日本中で肩を並ぶるものなき勢力のある家柄である。

4 禪尼の行につき、如何に感ずるか。(尊き身を以て、自ら障子張をなす。しかも切張をなす。かくて、子の時頼を教育せんとするのである。實に賢い婦人である。)

5 かくも賢い婦人に育てられた時頼は、どんな人になつたと思はれるか。賢い人になる。)

五 朗讀。(終迄。)

六 全文達讀。

第四時

要目

- 一 全文復習。

1 達讀。話述。

2 語句の應用。

招待。 つくろふ。 命ず。 おぼつかなき。 手つき。 ならば。 ことごとく。 重ねて。 見苦し。 知らせんとてかくする。 よる。

3 文字の應用。

招待。 張。 給。 若。 養。

教授

一 全文達讀。

二 兒童をして全文を話述せしむ。

三 語句の應用。

- 1 たん生日に招待する。午前十時に客を招く。明日十日の招待。
- 2 はなをの切れたのをつくろふ。屋根をつくろふ。
- 3 召使に命じて、しやうじを張らせる。命じたる事を忘るゝな。
- 4 三郎さんに出来るか出来ぬか、それはおぼつかない。
- 5 わかんぼが、今にもたふれさうなあるきぶり。おぼつかない足もと。
- 5 手つきがよい。足つきがわるい。こしつきがしつかりしてをる。

四 文字の應用。

- 1 弓張ちやうちん。長い弓。命じ給へ。
- 2 正しい。正直。
- 3 苦しい。苦し。若し。

- 6 重ねてたづねる。重ね〜心配をかける。重ねてお出で下さい。
- 7 ことごとく出来た。ことごとくまぢがつた。ことごとく死んでしまつた。
- 8 見苦しいなり。聞苦しいことゑ。
- 9 早く先生に告げんとて、急ぎて行く。
- 10 禪尼がかくするは時頼に教へんとてなり。
- 11 私がかく丈夫になりたるも、冷水よくをしたるによるべし。
かゝる身代になりたるも、まつたく節儉を守りて、働きたるによるなるべし。

第七 白雀 (十時間)

形式

一 文章 叙事文

第一段 財産を減らした。(十九頁八行迄)

或る農夫家業を怠りし結果、年一年と財産を減らす。親類や友達は、大に之れを心配するといふ事を以て筆を起す。

第二段 白雀の話。(二十二頁四行迄。)

友人白雀の作話を設けて、此の農夫の過を救はんとする事を記述す。

第一節 雀のせいではあるまいか。(二十頁六行迄。)

農夫自分の失行を悟らず、財産の減り行く罪を雀に歸せんとする事を記述す。

第二節 白雀をつかまへて見たい。(二十二頁四行迄。)

農夫友人の作話につりこまれ、白雀をつかまへて僥倖を求めんとする事を記述す。

第三段 いつにない早起。(二十五頁三行迄。)

友情をこめたる友達の畫策空しからず、農夫の過を救ふべき端緒をひらきし事を記述す。

第一節 白い雀は影も形も見えぬ。(二十三頁四行迄。)

大なる希望を懷きて、早朝より白雀を捜しまはりたれども、影も形も見せず。失望しつゝ家に歸れば、日は既に高く上れるにも係はらず、誰も起きる様子もなし。農夫は

此の様を見てむつと腹立たしくなりしものゝ、又其の中に、何事かを悟りしものゝ如き意味を含めて記述す。

第二節 下男が麥俵をかついで。(二十四頁二行迄。)

白雀を見つくることを得ざりしかども、自己の迷夢を破る種を得たる事を記述す。

第三節 下女がばけつをさげて。(二十五頁三行迄。)

迷夢を破るべき有力なる種、又一つを加へし事を記述す。

第四段 朝ね程損なものはない。(二十六頁四行迄。)

朝ねの損なる事だけは悟れり。しかし、白雀は、大なる意味を含めたる作話なる事には、未だ氣づかざるを記述す。

第五段 目がさめた。(二十七頁五行迄。)

第一節 雀のことはいつかわすれた。(二十六頁八行迄。)

第二節 御恩は一生忘れない。(二十七頁五行迄。)

農夫の迷夢は全く破れ、友情をこめたる友達の畫策、其の功を奏せし事を記述して、全文を結ぶ。

畑。(既教畠と對照。) 近。(訓讀近 既教。) 減 財(貝と才とに分解。同音字材と對照。) 産。(訓讀産 既教。) 坐(音讀坐 既教。) 飛(運筆順に注意。) 作(訓讀作 既教。) 之(際(祭 既教。類字阪 陣 障 既教。)) 若。(讀替若。類字苦 苦 既教。) 此(類字北 既教。) 其。敷。影。下男(下男 既教。) 借(人扁に昔 既教。) 驚。女。隣。損。必。(既教心と對照。) 週。晝。(既教晝と對照。) 忘。

三 語句

(うらやまる。)(羨。心病しく思はる。義) 身代。(身の代。身上。財産。) 財産。(身代、身上。) 世間話。(世の中、人間世上の話。) 近年。(近頃。あまり程經ぬ年。類語近日。) せい。(故。ため。) ふと。(不圖。はからず。おもひがけず。不意に。偶然に。) それはさうと。(意軽く前の話を受けて来て、新に又別の話をなす時に用ふる語。) 實際。(ほんとうに。全く。) 問返す。(反問。問に答へず更に問者に問ふ。) たかる。(集る。寄る。) いつになく。(いつものない。) 若しや。(ひよつとしたら。或は。萬一。) しきりに。(頻。繁く。つゞけて。たびたび。しばしば。かた。(質のし。抵當のしるし。形の意。) かすむ。(一部を奪ひ去る、少し盗む。目をかすむ。目を盗む。) 引つたくり。(引取る。奪ひ取る。)

教授

- 第一時 第一段 財産を減した農夫。讀方。
- 第二時 第二段 第一節 麥の取れないのは雀のせい。讀方。
- 第三時 第二段 第二節 其の雀をつかまへて見たい。要領。
- 第四時 同上 讀方。
- 第五時 第三段 第一節 白い雀は影も形も見えぬ。讀方。
- 第六時 第三段 第二節 下男が麥俵をかついで。讀方。
- 第七時 第三段 第三節 下女がばけつをさげて。讀方。
- 第八時 第四段 朝ねほど損なものはない。讀方。
- 第九時 第五段 目がさめた。讀方。
- 第十時 全文統括。

第一時

要目

- 一 第一段 財産を減した農夫。讀方。
- 1 本文に由り、何不足なく暮せし農夫が、五六年の中に財産を減せる事を知らしむ。

- 2 右財産を減したる理由は、家業を怠り、家事不取締より起りし事を推敲せしむ。
- 3 話述若くは文章を以て、親類や友人の心配せし事を具體的に敷衍す。
- 4 文字 畑（既教の畠と對照。） 近。減。財産。
- 5 語句 身代、財産。（異音同意の類語を以て平板を避けし事。） 段々、年々。（前同様、避板法。） よほど財産を減らした。（羨ましがらるゝ程の元の身代はなけれども、全く破産せしにわらず。まだ幾分の財産を餘せり。今にして従前の失行を悔悟せしならば、再び財産を恢復するに足るべき餘地を存するなり。）

教授

- 一 第一段 朗讀。
- 二 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。
 - 1 此の農夫のものと身代は「どんなで有つたか。（人に羨まれるほどのよい身代であつた。）
 - 2 今は全く無くしたのか。（全く無くしたのでは無いが、餘程なくした。）
 - 3 それについて、友だちや親類はどんなに思つたか。（心配した。）
- 三 第一段 達讀。
- 四 左記の設問に由り、語句の吟味を行ふ。

- 1 身代と財産との意義に相違があるか。（ない。）（要目に示せる避板の用意を教授す。）
 - 2 「畑の取高が減る。」なぜ減るのか。（作物の世話の仕方が充分でないから。）
 - 3 「牛が減る。」なぜ減るのか。（牛の世話の仕方が充分でないから。）
 - 4 此の農夫の不斷の働きぶりは、どんなで有ると想像が出来るか。（勉強しない。）
主人がなまける時には、他の家族は、如何で有う。（やはりなまける。）
下女や下男は如何で有う。（やはりなまける。）
 - 5 家の長たる主人の心得が悪いと、家族下女下男に至る迄、不心得になる。主人たるものは、特に注意をしなければならぬ。主婦も同様である。
- 五 左記の話述を以て、親類や友人の心配せる事を具體的に敷衍す。
- 1 此の農夫はどうも家業に精を出さぬ。それ故、人に羨まれる程の身代も、段々に減らした。この儘に捨ておいては、全く身代をつぶしてしまふ。どうかして、助けたいものだ。それは本人の心得を直さなければならぬ。そこで、「もつと精出さなければいけないでないか。」と、代る／＼忠告もしたが、持つて生れた性質であるか、一向きゝめがない。一同「困つた。」ものだといつて、心配するばかりであつた。
- 六 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 畑もたくさんある。
- 2 人にうらやまれるほどの身代。
- 3 財産をよほど減らした。
- 4 親類や友だちは大そう心配した。
- 5 畠、畑。近所。

第二一時

要目

- 一 第二段第一節 麥の取れないのは雀のせい。(二十頁五行迄。) 讀方。
 - 1 農夫は自己の不勉強より、收穫の減せる事を悟らず、雀の爲めなるかと誤解せることを知らしむ。
 - 2 文字 坐。飛。作。之。
 - 3 語句 世間話。近年。せい。
- 一 第一段 達讀。

教授

- 二 左記の文字を摘書し、讀方の豫備とす。
 - 1 草の上に坐り。世間話。
 - 2 飛んでゐた雀。
 - 3 作物を荒す。
 - 4 之を聞いて。
- 三 第二段第一節 朗讀。
- 四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。
 - 1 世間話とはどんな話であるか。(別にこれといふきまつた話ではない。世間の事について、何なりと思ひついた事を話すのである。)
 - 2 話は誰が初めたか。(友だちが。)(何の話を。(雀の話を。)
 - 3 雀の話は何から思ひついて出たのであるか。(飛んでゐた雀を見て。)
 - 4 どんな話をしたか。(雀のふえることや、作物を荒すことを。)
 - 4 農夫は其の話について、どんな事を感じたか。(どうも、僕のうちは、近年麥の取高が少い。それで大層財産を減らした。どうも合點が行かぬと思つてゐたが、今友だちの話に由ると、雀は大層作物を荒すものだと言つた。成るほど、これは雀のせいであるまいかと思つた。)

5 農夫は中々自分勝手な理屈を考へる。どこまでも自分の不勉強といふ事に気がつかぬ。

五 第一節 達讀。

六 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 雀が飛んでゐる。
- 2 作物を荒されてこまる。
- 3 之を話し、あれを聞く。

第三時

要目

一 第二段第二節 其の雀をつかんで見たい。(二十二頁四行迄。) 要領。

- 1 話述に由り、文章の要領を理解せしむ。
- 2 摘書法に由り、主要語句を教授す。
- 3 文字 際。返。若。
- 4 語句 實際。問返す。よつてたかつて。

教授

一 第二段第一節 達讀。

二 左記の語句は、第二段第二節の文章の骨子となるものなり。板書教授を行ふ。

- 1 白い雀を見たことがあるか。
- 2 實際居るのか。
- 3 大へんに仕合がよくなる。
- 4 毎年一羽づつしか出て来ない。
- 5 毎朝早くすを出て、ゑをさがしてすぐ歸つてしまふ。
- 6 其の雀をつかまへて見たい。

三 前板書の句につき左記の話述を行ふ。

- 1 「白い雀を見たことがあるか。」これは第一節の話からして、こんな事を問ひかけた。
- 2 「實際居るのか。」農夫は友達の間に対して、こんなに問返した。
- 3 「大へんに仕合がよくなる。」毎年一羽づつしか出ない。「朝早くすを出て、ゑをさがして、すぐに歸る。」友達は白雀について農夫に説明した。
- 4 「其の雀をつかまへて見たい。」白雀をつかまへたら、仕合がよくなると聞いたものだから、捉へて見たくなつた。中々慾な心はもつてゐるやうである。

- 四 前板書の文章を視寫せしむ。
- 五 第二節の文章につき、話述を行ふ。
- 六 左記の句を聽寫せしむ。

- 1 實際の話。
- 2 ふしぎさうな顔附。
- 3 よく働けば、しぜんと仕合がよくなる。

第四時

要目

一 第二段第二節 其の雀をつかまへて見たい。(二十二頁四行迄。) 讀方。

教授

- 一 左記の漢字を板書教授す。
- 1 實際。(際はコザト扁に祭^{マツリ}祭^{サイ}) 問返す(返^{カヘス}は返事^{ヘシ}の返。)
- 2 若。(類字 苦^{クルシ} 苦^{ニガシ} クルシ、ニガシは草冠に古^{フル}。若は草冠に右^{ミギ}。)
- 3 此。(類字 北^{キタ} 運筆順を教ふ。)

二 第二段第一節 達讀。

三 第二段第二節 默讀。朗讀。

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 「それはさうと、君は……見たことがあるか。」これはどんな形の文か。(問かけの文である。)
 - 2 「いや見たことがない……實際居るのか。」これはどんな形の文か。(やはり問かけの文である。)
 - 3 1と2とは同じ人の問ひかけであるか。(1は友だちで、2は農夫である。)
 - 4 問の文があれば、答の文がつくのが普通である。本文の様に甲が問ふ、又ついで、乙が問ふといふ様な文は間違つてゐないのか。(間違つてゐない。)
 - 5 問はれた時に、又問ふた人に問ふ事を何といふか。(問返す。)
 - 6 「その雀をつかまへて見たい。」誰がそんな事を思つたのか。(農夫が。)
 - 7 其の白雀を見つけるのには、いつ時分が宜いであろう。(朝早くでなくてはならぬ。)
- なぜ朝早くでなくてはならぬか。(朝早くすを出て、糸をさがしてすぐ歸るから。)
- なぜそんなに朝早く出かけるのか。(若し外の雀が見つけると、よつてたかつていぢめるか

- 8 「よつてたかつて。」どんなにする事か。(上から上へと寄つて來ること。)
- 9 「それはさうと。」これは話のどんな時に使ふか。(話しかけのつなぎを切つて、話の筋をかへる時に使ふ。)
- 10 「ふと思ひ出す。」どんなに思ひ出すのか。(思ひ出さうとは思はないで、ひよつと思ひ出す事。)

五 第二段第二節 達讀。

六 第一段第二節 達讀。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 ふしぎさうな顔附をして問返す。
- 2 若し白い雀を見つけたら、仕合がよくなる。
- 3 此の農夫。其の友だち。あの雀。
- 4 實際あつたことではなからう。
- 5 ふとわすれた。

第五時

要目

一 第三段第一節 白い雀は影も形も見えぬ。(二十三頁四行迄) 讀方。

1 第二段第二節(その雀をつかまへて見たい。)を承けて、本文を紹介す。

白雀は見つからずして、家に歸れば、一家擧つて朝寐の様。これに對する農夫の失望と不平。此の失望と不平の間に、何物をか感じつゝあるものゝ如き餘情を想像せしむ。

2 文字及び語句 敷。影。影も形も。しきりに。

準備

一 農夫家に歸り、朝寐の様を見て、兩手を組み、茫然と立てる様の繪畫。

教授

一 第二段第二節につき、左記の設問を行ひ、以て本節教授の端緒をひらく。

- 1 友人は農夫に何の話をしたか。(白雀の話。)其れを簡單に話してごらん。
- 2 農夫は、其の話を聞いて、どんな心を起したか。(白雀をとつて見たい。)
- 3 それから、農夫は、どんなにしたと想像が出来るか。(朝早くから、白雀を捜しに出る。)

4 何時か、其の白雀を見つけたる事が、出来ると思ふか。(出来ない。)
なぜ出来ないか。(白雀などはあるものでないから。)

二 左記の板書教授を行ふ。

1 屋敷のまはりから野原の方まで。

2 影も形も見えません。

3 牛はしきりに鳴いてゐる。

三 第三段第一節 朗讀。

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 農夫は如何にしたか。(次の朝、農夫はいつになく早く起きて……。)

2 雀は見つかったか。(見つからない。その事が何と書いてあるか。(影も形も見えません。)

3 農夫の出かける時は、何時頃であつた。歸つて来たのは何時頃であつたか。

(出る時は朝早かつた。歸つた時は、日はもう高く上つてゐる。)

4 日が高く上つてをる時分に、大抵の家は。(起きて、せつせと仕事をしてをる。)

自分の家はどうかであつたか。(戸がしまつてゐて、誰も起きてゐる様子がない。)

5 朝寝をしてをるものがあるから、「早く起きなさい。起きて下さい。」と催促してをるものが

ある。何であるか。(牛小屋の牛。)

五 第三段第一節 達讀。

六 左記の設問に由り、語句の吟味を行ふ。

1 「いつになく。」農夫は早く起きて、白雀を捜しに出た。ふだんは、どうであるか。(朝寝をす
る。)

2 「影も形も見えません。」どんな場合に使う句であるか。(全く見えない場合に。)

3 「しきりに。」此の語を應用してごらん。(しきりに働く。しきりに喜ぶ。……)

七 左記の文字及び語句を書取らしむ。

1 敷石、敷居。 影、形。

2 若しや白雀が居はしまいか。

3 しきりと草をさいそくする。

第六時

要目

一 第三段第二節 下男が麥俵をかついで。(二十四頁二行迄。) 讀方。

I 第一節に於て、農夫は自家の朝寐の様を見て、何物をか感じつゝある際、下男の横着なる行動を目撃せり。失望不平に加ふるに、驚愕を以てす。

2 文字 下男。借。驚。 語句 居酒屋。かた。

教授

一 第三段第一節 達讀。

二 左記の語句を摘書教授す。

1 「下男」音讀「下男」既教。しもをとこ をとこしゆう。

2 「居酒屋」。店頭にて酒を飲ます酒屋。

3 「酒代の借」。「借のかた」。「借のひきあて。抵當。

4 「驚」。敬に馬。

三 第三段第二節 朗讀。

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 「裏門から出る。」誰がどんなにして。(下男が麥俵をかついで。)

2 農夫はそれを見て何と思つたか。(水車場へ行くのかと思つた。)

3 水車場へ何をしに行くのかと思つてゐたのか。(麥を搗く爲めに、持つて行くのかと思つて

ゐた。)

4 ところが何處へ行つたか。(居酒屋の方へ行く。)

5 何の爲めに、居酒屋の方へ行つたのか。(居酒屋に酒代の借があるから、其のかたに持つて行かうとするのであつた。)

6 其の事を知つた時の農夫の心は、どんなにあつたか。どうしたか。(驚いて、麥俵をとりもどした。)

五 前問を承けて、次の話述を行ふ。

1 午の世話をするのは下男の仕事である。ところが、主人が朝寐坊だから、下男もやつぱり朝寐坊。牛が、頻りに、「もう〜。」と鳴いて、秣草の催促をしても、一向構はない様子。農夫はこれを見て、むつとした。早速下男を起さうと思つてをると、その中に、下男が麥俵をかついで、裏門から出て来る。むつとしてゐた腸もをさまつた。「律義な男だ。起さなくともちやんと起きて、働いてをる。大方麥を搗かうと思つて、水車場へ行くので有う。」

ところが、水車場の方へは行かない。「おや變だな。あんな方へ麥を持つて行く用事はない筈だが、どこへ行くのか後をつけてやらう。」

下男は主人が後をつけてをるとは知らず、さつさと居酒屋の方へ行く。「こいつ横着な奴だ。」

麥俵をどうかするに違なし。」

早速追つかけて行つて、「こら待て、何處へ行くのか、其の俵をどうする積か。」

下男は嚴敷問ひつめられて、隠す事も出来ず、「どうも濟みません。實は居酒屋に酒代の借があるのです、其のかたに麥俵をちよつと借りる積であつたのです。」

六 第三段第二節 達讀。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 酒代の借のかたに麥俵。
- 2 麥俵をかついで裏門から出るところを主人に見つけられた。
- 3 主人は驚いた。
- 4 主人が主人なら、下男も下男。

第七時

要目

- 一 第三段第三節 下女がばけつをさげて。(二十五頁三行迄。)讀方。
- 1 下男の横着に一驚を喫したる農夫。更に下女の横着を目撃して、如何なる感に打たれたるか

を想像せしむる事は、第四段の讀方の前提となるものなり。

2 農夫の驚きの様を寫せる挿畫觀察より初めて、本文に導く。

3 文字 女、隣。 語句 下女、かすめ、引たくり。

準備

一 挿畫擴大畫。

教授

一 第三段第二節 達讀。

二 左記の設問に由り、挿畫を觀察せしむ。

- 1 此の挿畫は農夫の如何なる様子を表はして居るか。(驚ける様子。)
- 2 何を見て驚いてをるので有う。(向ふへ行く女の人を見て。)
- 3 第二節に於ては何に驚いたか。(下男が麥俵をかついで行くのを見て。)
- 4 向ふへ行く女は何で有うか。(下女で有う。)
- 5 たゞ下女を見て驚くものはない。これには何か譯のある事である。

三 第三段第三節 朗讀。(新出文字は兒童の質問を待つて摘書す。)

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 下女の手に提げてゐるのは何か。(牛乳を入れたばけつ。)
 - 2 農夫は、其の下女を見て、何故に驚いたか。(自分の家へは持つてはいらず、隣の家の方へ行くから。)
 - 3 下女は、その牛乳をどうする積で、持つて行くのであつたか。(隣の家へ賣るつもり。)
 - 4 こんな事は、其の日の一朝だけの事であつたか。(毎朝の事。)
 - 5 農夫はその事を知つてどうしたか。(怒つて其のばけつを引つた。)
 - 6 「目をかすめる。」とは、どんなにする事か。(目をぬすむ事。知れない様に隠れてする事。)
 - 7 主人の目をかすめて、横着する事をしたのは、下女だけであるか。(下男も。)
 - 8 下男や下女に目をかすめられたのはなぜか。(朝寐をするから。)
 - 9 今朝その事を見付ける事の出来たのはなぜか。(早起をしたから。)
- 五 第三段第三節 達讀。
- 六 第三段第二節第三節 通讀。
- 七 左記の語句を聽寫せしむ。
- 1 主人の目をかすめて、麥俵をかつぎ出す下男。
 - 2 主人の目をかすめて牛乳をもち出す下女。
 - 3 近所、隣。

第八時

要目

- 一 第四段 朝ね程損なものはない。(二十六頁四行迄。)讀方。
- 1 第三段第二節第三節に由つて、朝ねの損なる事を、初めて悟れり。しかし、農夫の愚昧なる白雀は作話なる事に氣附かざるなり。
- 2 文字。損。必。

教授

- 一 左記の設問に由り、本文の大意を理解せしむ。
 - 1 下男や下女は、なぜ主人の目をかすめる事が出来たか。(主人が朝寐をするから。)
 - 2 農夫は、下男や下女の横着を見つけることが出来たのは、なぜか。(早起をしたから。)
 - 3 農夫は、朝寐につき、どんな事を悟つたと思ふか。(朝寐は損なものである事を。)
 - 4 これまで、身代が段々に減つたのは、何の爲めであるかを悟つたか。(朝寐の爲めである事を。)

5 「朝ね程損なものはない。朝ねをしてゐる間に身代が減つて行く。」〔板書〕
農夫の悟つた事は此の文である。読んでごらん。

二 第四段 朗讀。(新出文字は、兒童の質問に應じて、摘書教授す。)

三 左の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 農夫は如何なる事を悟つたか、妻に何といつて話したか。

2 農夫が家の中へかけこんだ時、妻はどうしてゐたか。(朝寐をしてゐた。)

3 それから、農夫や妻はどうしたか。(早起をする様になつた。)

4 主人や其の妻が早起をする様になれば、下男や下女はどうであるか。(又早起をする。)

5 農夫は、早く起きて、何仕事をするのか。(別に仕事をしない。やつぱり白雀を捜しに出る。)

6 農夫は朝寐の損な事に氣が附いた。もうこれで充分であるか。(今一つ、早く起きて、仕事に

精出さねば、身代が減るといふ事に氣が附かねばならぬ。)

四 第四節 達續。

五 左記の語句を聽寫せしむ。

1 朝ね程損なものはない。身代が減つたのも朝ねのせいだ。

2 早く起きて、よく働かねば、もとの身代にもどすことはできぬ。

3 必ずわすれてはならぬ。必ず朝ねをしてはならぬ。

第九時

要目

一 第五段 目がさめた。(終迄。)讀方。

1 第一節 雀のことはいつかわすれた。(二十六頁八行迄。)

白雀の話が、動機となりて、早起の習慣をつくる緒となり、其の中に、白雀の事はいつとなく忘れ、早起が動機となりて、働き手となるの本をつくれり。

2 第二節 御恩は一生忘れない。(終迄。)

農夫の迷夢全くさめ、情誼をこめたる友人の畫策、其の功を奏せし事を記述して、全文を結ぶ。

3 文字。畫、忘、週。

教授

一 第一節 朗讀。(新出文字週畫は、兒童の質問に應じて、摘書教授す。)

二 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 「雀のことはいつかわすれて。」〔板書。〕

雀の事は忘てもよい。忘れた方がよいのであるが、忘れてならぬ事がある。何であるか。

(身代を取戻す事を忘れてはならぬ。)

2 此の事を忘れなかつたら、どうするで有う。(よく働く。)

三 第二節 朗讀。(新出文字忘は兒童の質問に應じて、摘書教授す。)

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

1 「目がさめた。」これはどんな事であるか。

(身代が減るのは、自分が働かないといふ事に、氣が附かないのは、丁度眠つてゐる様なもの。夢を見てゐる様なものである。ところが働かねばならぬといふ事に、初めて氣が附いたのは目のさめた様なものであるから、目がさめたといふのは、「氣がついた、悟つた。」といふ事である。)

2 目をさましてくれたのは、誰の恩であるか。(友人の恩である。)

3 友人がゐなかつたら、農夫の財産はどうなつて仕舞ふで有う。(全く無くなつて仕舞ふ。)

4 農夫は友人に何とお禮をいつたか。(おかげで、目がさめた、御恩は一生忘れない。)

5 「かたく友だちの手を握る。」〔板書〕

どんな時に堅く手を握るか。(大へん嬉しい時か、悲しい様な時に。)

五 第五段 達讀。

六 左記の語句を聽寫せしむ。

1 一週は七日。

2 夜、晝、朝、夕方。

3 雀のことはいつか忘れた。

4 目がさめた。氣がついた。さとつた。

5 此の御恩は一生忘れない。

第十時

要目

一 全文統括。

1 全文達讀。

2 文章構成、題目命名。

3 文字及び語句の應用。

教授

一 全文達讀。

二 文章構成、題目命名。

1 第一段 財産を減らした。

イ 親類や友だちが心配したのは何故か。 農夫を忠告しようとして、白雀の話を持ち出したのはなぜか。 これ等の原因となるべき句を本項中より選び出してごらん。(財産を減らした。)

2 第二段第一節 雀のせいではあるまいか。

イ 農夫が財産を減らしたのは何故か。(働かぬから。)

ロ 働かぬから財産を減らしたといふ事を、農夫は知つてゐるか。(知らぬ。)

ハ こんな分り易い事も氣が附かぬ、全く夢を見てゐるやうである。本節中、如何にも夢を見て居ると思はれる句を選び出してごらん。(雀のせいではあるまいか。)

3 第二段第二節 白雀をつかまへて見たい。

イ 農夫が目をさます種となつたのは何か。(白雀。)

ロ 本節中 其の種となつた句を選び出してごらん。題目とするに適當な句を。(白雀をつか

まへて見たい。)

4 第三段第一節 白い雀は影も形も見えぬ。

イ 本節の題目は、「白雀は影も形も見えぬ。」と附ける。これについて、農夫が「どうしたか影も形も見えなかつたのであるか。」「見えなかつたらどうしたか。」といふ事を話してごらん。

5 第三段第二節 下男が麥俵をかついで。

イ 目がさめるのは、珍しい事を見るとか。面白い話を聞くとか。悲しい事に出逢ふとか何か變つた事のある時に、ひよつと目がさめるものである。

ロ 本節中に於て、農夫の目をさましたのは何であるか。それを以て、題目とする選び出してごらん。(下男が麥俵をかついで。)

6 第三段第三節 下女がばけつをさげて。

イ 前節と同様に考へて、題目をつけてごらん。

7 第四段 朝ねほど損なものはない。

イ 本節中にも題目とするに適當な句がある、選び出してごらん。(朝ねほど損なものはない。)

8 第五段 目がさめた。

イ 本節中には殊に愉快な題目がある。選び出してごらん。(目がさめた。)

三 文字及び語句の練習應用。

- 1 之、此の、其の。 飛ぶ、走る、伸る。 夜、晝。
- 2 下男、下女。 侍る、返す。 隣、近所。 近年、近ごろ。
- 3 食べすぎたせいで……。
- 4 君はそれを實際見たのか。
- 5 ひかふから、人がしきりによんでゐる。

第九 ワザクラベ (四時間)

形式

一 文章 敘事文 頭括式

第一節 晝工ト大工。(二十七頁八行大工アリ迄。)

先づ名高き晝工と、世に聞えたる大工とを紹介して、起首とす。

第二節 飛彈工。(二十九頁六行迄。)

稀代の名手妙工時を同うして生る。親密なる間柄の事として、互に秘術を盡して、其の技を競ふ。「工如何に名手なりと雖も、及物の上の細工なら。何程の事かわらん。」と思ひし川成、先以て、工の技倆に驚けり。挿畫に文章によく其の状態を寫せり。

第三節 百濟川成 (終迄)

「予の技倆に驚きて、逃げ歸りたる川成。彼如何に達人なりと雖も、筆の先の技なり。何程の事かわらん。」と思ひし工、たちまちにして、膽を拉がれたる様、目にするが如くに寫せり。

二 文字

晝 <small>カ</small> (類字書晝)	既教	建 <small>タツ</small>	開 <small>ヒラク</small>	閉 <small>トジ</small>	幾 <small>ヒコ</small>	度 <small>タ</small> (音讀度)	既教	臭 <small>シウ</small>	既教	自 <small>ジ</small>	犬 <small>イヌ</small>
に分解)	腹 <small>ハラ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>	如何 <small>イカ</small>

三 語句

晝工。(繪かき。晝人。) 一日(ある日。) 四角四面。(周圍に角の四つある形。何所も同じ面を有する所。) 何心なく。(何思はず、何の考もなく。平氣で。) はたと。(ビシン。キイット。ヒョット等の形容詞。) 閉づ。(締り合ふ。) くちをしくも。(口惜。くやし。残念。のこりをし。遺憾。「も」は感詞。) 音なふ。(尋ぬる。訪問。音づる。) いざ。(誘ふ時に發する

聲。いで。さわ。どりや。(こなた。(此方。こちり。こつち。)さらば。(然らばの約。それでは。)黒ふくれ。(黒脹れ。色黒く脹れ上る。)横たはる。(横にたふる。横になる。)臭氣。(くさき香。いやな香。)鼻をつく。(鼻にきつくにはふ時の形容法。)あつと。(驚く時の聲。)腹をかへて。(笑ふ時の様。腹がよれる。臍がよれる等の類。)恐る〜。(こはどは。)近よる。(近寄。近づく。)こは。(此者はの義。其物事を指し定めて、驚くに發する聲。こは如何に。こはそも。)

内容

一 飛彈工百濟川成二人の妙技を敎して、左記の事項を敎ふ。

- 1 我國は古來手わざの妙手を出せること。
- 2 名人同士の競技。

敎授

一 横斷法に由り、左記の四敎時に分つ。

- 第一時 第一、二節 讀方敎授の豫備として、主要文字及び語句の敎授をなす。
- 第二時 第一、二節 讀方。
- 第三時 第三節 讀方敎授の豫備として、主要文字及び語句の敎授をなす。

参考

第四時 第三節 讀方。

一 百濟川成

本姓は餘、其の先は百濟の人なり。武藝に長じて、よく強弓をひき、兼て圖畫を善くす。大同中左近衛となり、屬召見せらる。寫す所の物、山川草木精妙、生けるが如し。かねて宮中に在り、人をして従者を喚ばしむ。辭するに、未だ顔容を知らざるを以てす。川成即ち紙をとり之れを圖す。其の人案驗して、之れを得。後世畫をいふ者、多く則を川成にとるといふ。弘仁十四年、美作權少目に任せられ、後外從五位下に敍せらる。承和中、備中播磨介を經、姓百濟朝臣を給ひ、尋で從五位下に進み、安藝介に遷る。時人之れを榮とす。仁壽三年八月卒す。或は謂ふ、河成匠長飛彈工と相知り、時々互に技を争ふ。因て時人二人を招きて、其の長ずる所を論ぞしめ、以て一坐の興をなせしといふ。

二 飛彈工

王朝時代に、飛彈國より、朝廷に貢したる木工をいふ。飛彈國人は、古より木工の技に長じたるが故に、早くより、工人を朝廷に貢する義務を課せられたり。其の工人は、工匠の技に巧なりしこと勿論なりと雖も、亦往古より多くの木の子を出す。木の子はオガヒキともいふ。後の木挽な

り。王朝時代の末年には、工人よりも寧ろ木挽職の者多かりき。

第一時

要目

一 第一、二節 讀方教授の豫備として、左記の文字及語句を教授す。

1 文字 畫 建 開 閉 幾 笑

2 語句 名高き畫工。世に聞えたる大工。一日。何心なく。はたと閉づ。口をしくも笑聲を後にして歸る。得。たまはる。

教授

一 新出文字につき、成るべく類字を對照して、教授す。

1 書カく。畫ヒ。畫ガ。書畫。

2 門モン。問モン。問アヒ。問カン。開ケン。開ヒラ。閉ト。

3 笑ワラフ。笑ホウ。建タツ。幾イツ。

二 新出語句につき、成るべく多方面に應用して、教授す。

1 畫工。職工。手工。木工。

2 名高き畫工、世に聞えたる大工。世に聞えたる山、名高き川。

名高し。其の名世に聞ゆ。世に知らる。人に知らる。

3 一日、ある日。

4 何心なく、何の考もなく、何とも思はず、何の氣もなく。

門が開いてゐたから、何心なく、おくの方へはいて行くと、おまはりさんがゐて、「こらたれだ」。

何心なく、木の葉をかきのけて見ると、下には大きなまつたけが二本、頭を土の上に出して。

5 はたと閉づ。ばつたり閉づ。

ばつと開き、はたと閉づ。ばつたりつきあたる。はたと出あふ。

6 くちをしくも、くやしくも。かなしくも。うれしくも。

7 くちをしくも、笑聲を後にして歸る。

くちをしくてたまらないが、しかたがないから歸る。歸る後には、ワハ、、、と笑ひ聲。大山君萬歳の聲を後にして行く。

ふみちやんが、「をばさん、歸つちやいけなさい。」と泣きとめる聲を後にして歸る。

8 繪をかいて下さい、繪ををかきてたまはりました。

9 入ることができぬ。入ることを得ず。書くことを得たり。讀むことを得ず。

第二時

要目

- 一 畫工と大工。(二十七頁八行大工アリ迄。)讀方。
- 二 第二節 飛彈工。(二十九頁六行迄。)讀方。
 - 1 文字及び語句につきては、既に第一時に於て、豫習あり。兒童をして、反覆熟讀して、文章を理解せしむべし。
 - 2 百濟川成の驚ける様を寫せる挿畫觀察に由り、文章「南ノ口ヨリ入ラントスレバ、其ノ戸ハタト閉ヅ。驚キテ西ノ口ヨリ……。」と對照して、趣味を深からしむべし。

準備

- 一 挿畫擴大畫。

教授

- 一 欄外摘書の文字を讀ましむ。
- 二 第一節 反覆熟讀。

三 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 「ツザクラベ。」誰と誰とがわざくらべをしたのか。(百濟川成と飛彈の工とが。)
- 2 川成工此の二人の上手なわざは何であるか。(川成は畫。工は大工。)
- 3 普通の畫工、普通の大工であるか。(名高き畫工 世に聞えたる大工。)
- 4 此の挿畫の人物は誰か。(川成。)川成の今の様子はどんなであるか。(驚いた様子。)
- 5 川成は今どんなにしようとしてゐるのか。(此の家の中へはいらうとて、片足を上げてをる。)
- 6 川成は、今に家の中へはいつてしまふのか。(はいることが出來ない。)
なぜはいることが出來ないのか。(はいらうとすると、自然と戸が閉づるのである。)
- 7 こんな器用な家は誰が立てたのか。(飛彈の工が建てた。)
- 8 どんな考で、此の家を建てたのか。(川成を驚かせようと思つて。)
- 9 此の家を建てる、それからどうしたか。(川成をよんだ。)
- 10 何と言つて呼んだか。(我此ノコロ小サキ堂ヲ建テタリ……。)
- 11 呼ばれた川成はどうしかた。詳しく話してごらん。

四 第一、二節 達讀。

五 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 四方ノカベニ繪ヲカキテタマハリタシ。
- 2 四方ノ戸皆開キタリ。
- 3 西ノ戸ハタト閉ヂテ、南ノ戸開ク。
- 4 工ノ笑聲ヲ後ニシテ歸レリ。
- 5 幾度カマハリタレドモ入ルコトヲ得ズ。

第三時

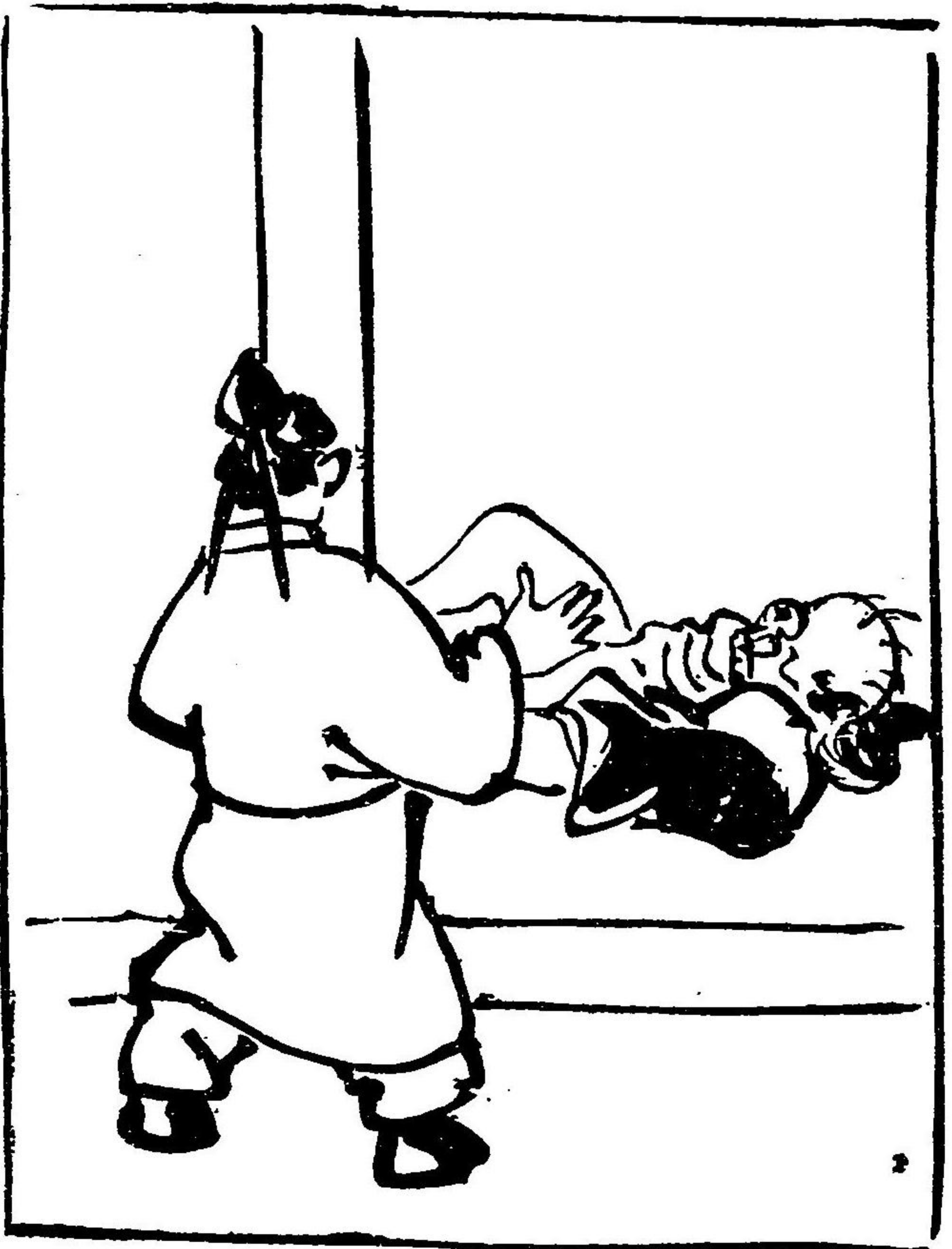
要目

- 一 第三節 讀方教授の豫習として、左記の文字及語句を教授す。
 - 1 文字 度。臭。腹。如何。
 - 2 語句 音なふ。いざこなたへ。さらばとて。横たはる。臭氣鼻をつく。あつと。腹をかゝへて笑ふ。恐るゝ。近よる。こは如何に。

教授

一 新出文字につき教授す。

- 1 度。度。度。渡。
- 2 頭。顔。手。足。鼻。腹。



- 3 臭氣。如何。

二 新出語句につき、教授す。

- 1 三郎さんのうちをたづねる。 太郎さんのうちを音なふ。
- 2 さわこちらへ、いざこなたへ。 かなたへ、そなたへ。
- 3 ……書いて下さいといつた。それではと言つて筆をとつた。
さわこちらへおはいり下さいといふ。それではごめん下さいと言つて内にはいつた。
いざこなたへといふ。さらばとて内に入りたり。
- 4 横にする、横たへる。 横になる、横たはる。 横きる。
- 5 臭氣、香氣。 鼻をつく、鼻をさす。
- 6 わつと聲を立てる、きやつとさけぶ、わつと泣く、わつと驚く。
- 7 腹をかゝへて笑ふ、手をうつて喜ぶ、ひざをたゝいてかんしんする、まゆをよせて笑ふ、青すぢ立て、おこる、うでをくんで考へる。
- 8 こはくそばによる、恐るく近よる。 近くによる、近よる、近づく。
- 9 これは又どうしたことか、こは如何に。
ふたをとりて見れば、こは如何に、大切な……は影もなし。

第四時

要目

- 一 第三節 百濟川成。(終迄。) 讀方。
 - 1 文字及び語句につきては、既に第一時に於て、豫習あり。兒童をして、反覆熟讀して、文章を理解せしむべし。

教授

- 一 第一、二節 達讀。
- 二 欄外の文字を讀ましむ。
- 三 第三節 反覆熟讀。
- 四 左記の設問に由り 文章の理解を確實にす。
 - 1 「腹をかゝへて笑ふ。」 誰が誰を。(川成が工を。)

なぜ笑つたか。(工が驚き、わつと聲立て、にげ出したから。)

工は何に驚いたのか。(黒ぶくれになりて、くさりたる死人横はりて、臭氣鼻をつくが如き様を見て驚いた。)
 - 2 工はなぜそんな所へ行つたか。(川成がいざこなたへといつたから。)

- 3 「こは如何に。」どんな時に出す言葉であるか。(驚いた時に出す言葉。なぜ驚いたか。(死人と見えしはふすまにゑがける繪であつたから。誰がゑがいた繪であるか。(川成がゑがいた繪。)
- 4 「恐るゝ近より見る。」誰が何を見たのか。(工が死人を見た。)なぜそんなにして恐ろしいものを見るのか。(かく我の居るに何ゆゑに入り給はざるかといふから、仕方なしに見た。)

五 第三節 達讀。

六 全文達讀。

七 左記の設問に由り、全文の理解を確實にす。

- 1 「わざぐくらべ。」誰と誰とのわざぐくらべであるか。(百濟川成と飛彈工との技くらべ。どちらが勝つたか。(初は工が勝つて、後には川成が勝つた。)
- 2 工はどんなにして、川成をまかしたか。詳しく話してごらん。川成はどんなにして、工をまかしたか。詳しく話してごらん。
- 八 左記の語句を聽寫せしむ。
 - 1 畫工と大工とのわざぐくらべ

第十 かぢ屋 (四時間)

形式

一 文章 敘事文

- 2 川成はくちをしくも、工の笑聲を後にして歸る。
- 3 工は川成のゑがける死人の繪を見て、驚き、聲を立て、にげ出す。
- 第一節 氣だてのやさしい老人。(三十頁五行迄。)
- 老人の容貌、及び氣質を述べて起首とす。
- 第二節 トンテンカン、トンテンカン。(三十三頁二行事もある迄。)
- 主として、老人の平素の働きぶりを述べ。
- 第三節 人に知られた刀かぢ。(三十三頁九行迄。)
- 老人の話を書して、昔の身元を述べ、第九課に對應して、清淨を貴びし刀かぢの情況を紹介す。
- 第四節 相かはらずトンテンカン。(終迄)
- 働き手の老人の後を受つげる働き手のむすこの現在を述べて、本文を結ぶ。

二 文字

頼タシム 翌ヨク (既教の羽と立とに分解。) 元モト (類字光ヒカリ 既教。) 太刀タチ (太太刀フトンタカチ 既教。) 亂ラン
何時イツ 奉ホウ

三 語句

するどく。(鋭。すどくの轉か。及利くして喜く切る。勢疾し。はげし。たけし。) いたつて。(此の上なく。極めて。至極。) 氣だて。(氣性。こゝろだて。意氣。) やさし。(圭角しからず。柔和。温順。轉じて、「難からず。」容易し。「の意に用ふ。」きたふ。(鍛。) 人に知られた。(世間に聞えた。名高し。) 大太刀、小太刀。(大きな太刀、小さな太刀。) 清む。(淨。穢れをとる。不淨を去る。) 一心不亂。(心を一方にこらして、他を顧みざること。わき見もふらず。一生懸命。) 翌年。(すぐる年。) ひすこ。(息。産子の義。男の子。)

内容

- 一 第九課の技藝に關聯して、刀鍛冶の清淨を尙びしことを説かんが爲めに、老人の話を擧ぐ。
- 二 勤勉を主として、老人の性行を記述す。

教授

- 一 横斷的排列法に由り、左記の四教時に分つ。

- 第一時 全文主要語句の教授。
- 第二時 第一節 氣だてのやさしい老人。第一節 トンテンカン。讀方。
- 第三時 第三節 人に知られた刀かぢ。第四節 相かはらずトンテンカン。讀方。
- 第四時 全文 復習。

第一時

要目

- 一 主要語句の板書教授に由り、全文讀方の豫備教授とす。
- 1 文字 頼 翌 元 太刀 亂 何時 奉
- 2 語句 するどい目。氣だてのやさしい老人。人に知られた刀かぢ。大太刀、小太刀。一心不亂。

教授

- 一 要目に記せる語句を板書教授。
- 二 語句の應用
 - 1 するど目つぎ。するど顔。おそろし目。こは顔。するどはもの。

- 2 氣だてがやさしい。氣がやさしい。心だてがよい。
 - 3 之は人に知られた刀かぢ。ひやうばんの刀かぢ。名高い刀かぢ。刀かぢの……さんといへば、子供までが知つてをる。これでも元はりつばであつた。
 - 4 大太刀。小太刀。小刀。わきざし。
 - 5 一心不亂に働く。一生懸命に働く。わき目もふらず働く。
- 三 要目に示せる文字 板書教授。
- 四 文字應用書取。
- 1 金たがのつくろひを頼む。頼んだ事はすぐ翌日に。
 - 2 元は刀かぢ。りつばな太刀。
 - 3 一心不亂に働く。何時も丈夫さうな老人。
 - 4 奉公に行く。

第二時

要目

- 一 第一節 氣だてのやさしい老人。(三十頁五行迄。) 讀方。

- 1 恐ろしさうな容貌と、やさしい氣だてとの對應を味はしむ。
- 二 第二節 トンテンカン、トンテンカン。(三十三頁三行事もある迄。) 讀方。
 - 1 「毎朝早くから……」。「一日も休んだ事がない」「あせを流しながら暮方まで……」其他本節の大部分は、かぢ屋の老人の身體壯健に、且つ勤勉なる事を表はす。
 - 2 「つくろひを頼んだ事があつた。翌日すぐに……」。「僕に色々な話……」は、前節に於ける、老人の氣立のやさしき様を含む。

教授

- 一 第一、二節 朗讀。
- 二 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。
 - 1 老人の氣だては、どんなであつたか。(やさしい。)
 - 2 ちよつと見た時の様子は、どんなであつた。(おそろしい様子。)
 - 3 どんなで恐ろしく見えたのか。(せいが高く、目がするどくて。)
- 三 第二節の文章に於て、老人の氣立が優しい事を表はしてをる句は、どれか。(つくろひを頼んだ事があつたが、翌日すぐに……)(僕に色々な話を……)
- 四 其の他の句を、すべて集めて考へると、此の老人は如何なる人であるかを推しはかる事が出

来るか。(働き手なる事を表はしてをる。)
すべての句は、皆老人の働き手なるを表はしてをるが、中でも働き手なる事を表はすに、力のある句は何々か。(毎朝早くから。)(一日も休んだ事がない。)(夏のどんな暑い日でも……。)

三 第一、二節 達讀

四 左記の設問に由り、各節に題目を命名せしむ。

- 1 第一節中、一番心持のよい句をとつて、題目をつけてごらん。(氣だてのやさしい老人。)
- 2 第二節中で、今でも其の老人がせつせと働いてをる様子が、目に見え、耳に聞える様な心持をさせる句がある。それを題目とするから、考へてごらん。(トンテカン、トンテカン。)

五 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 かぢ屋の老人は、ちよつと見ると、おそろしいが、氣だてがいたつてやさしい方だ。
- 2 朝早くから、つちを打つ音、トンテカン。
- 3 いくら暑くも、暮方までトンテカン。

第三時

要目

- 一 第三節 人に知られた刀かぢ。(三十三頁九行迄。)讀方。
 - 1 「刀は武士のたましい。」「きたへる時は身を清め。」は挿畫と對照して、刀かぢの嚴めしき様を想像せしむ。
- 二 第四節 相かはらず、トンテンカン。(終迄。)讀方。
 - 1 働き手の老人の後に、働き手のむすこを舉げて、内容とし、相かはらず、トンテンカンの句を以て、全文を結べるは趣味の存する所なり。

準備

- 一 挿畫擴大畫。

教授

- 一 第一節第二節 達讀。
- 二 第三節第四節 朗讀。
- 三 挿畫につき、左記の事項を觀察せしむ。
 - 1 正面に膝を立て、働くは主人にして、主人に向つて、相槌を打てる二人は弟子なり。
 - 2 主従一生懸命に刀をうつ。火花の散る様勇まし。

三 仕事場の周囲に標繩を張り、服装亦普通の職工服とは大に趣を異にす。
四 左記の設問に由り、挿畫と文章とを對照せしむ。

1 挿畫は本文中のどの句を表はしたるものか。(刀は武士のたましい……一心不亂に打つた。)
2 老人の服装や、仕事場の様子は、近頃までこんなにあつたのか。(近頃はかうではない。)
今日はなぜ元と變つたのであるか。(元は刀かぢであつたが。今は小刀や釘などを造るかぢだから。)

3 様子が變つたにせよ、今でも此の老人は達者で働いて居るか。(去年の暮に死んでしまつた。)
五 第三節第四節 達讀。

六 左記の設問に由り、題目を命名せしむ。

1 第三節中、此の老人の若い時の身元を表はしてをる句は何か。(人に知られた刀かぢ。)
2 氣だての優しい働き手の老人は死んでしまつた。けれども此のかぢ屋にとつて、實に目出度い事がある。何であるか。(働き手のむすこがあること。)
3 むすこが働き手であることを表はしてをる句は。(朝から晩まで、相かはらず、トンテンカン。)
4 此の「相かはらず」は、實に目出度い。氣だての優しい老人の話を、目出度いトンテンカンで、結んでゐるのは愉快である。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

1 第三せつ 人に知られた刀かぢ。
第四せつ 相かはらずトンテンカン。
2 一心不亂に、トンテンカンと打つたばに、火花をちらす様勇まし。

第四時

要目

一 全文 復習。

教授

一 全文 達讀。
二 各節の題目を筆記せしむ。
三 左記の文を聽寫せしむ。
1 父は、いたつて丈夫でございましたが、年をとれば、仕方がございません。去年の暮に死んでしまひました。

私は父の稼業について、トンテンカンと働いてゐます。どうかひいきに願ひ申します。

- 2 頼む。翌日、翌年。奉公先。何時。一心不乱。
- 3 しゆうとけんとは軍人のたましひ。
- 四 全文の要領を話さしむ。

第十一 花ごよみ (五時間)

形式

一 文章 七五調 韻文

- 1 第一節 一月福壽草。二月梅に鶯
- 第二節 三月桃。四月櫻。
- 第三節 五月藤。六月かきつばた。
- 第四節 七月朝顔。八月はす。
- 第五節 九月月見草。十月萩。
- 第六節 十一月菊。
- 第七節 十二月さっかんか。

二 文字

香。紅。(訓讀紅) 既教。白。(訓讀白) 既教。緑。(訓讀ミドリ) 既教。卷。(ウ冠に日女。)

三 語句

こよみ。(曆。日讀の義。天體運行の順序系統を月及日等に割當てたるもの。) 花ごよみ。(月及び季節の推移、即ち曆を花の季節に表はしたる意。) 黄金の色。(黄金はきがねの轉。金色。黄色。) 色暖く。(黄色は暖き感を與ふ色なり。) ほころびそむ。(綻。閉ぢたるが解くること。口を開くこと。開き初める。) 野べ。(野邊。野のあたり。) 新緑。(初夏の草木の青葉。) 藤波。(藤の花の房が、風に靡きて、波の如くなるに由りて、此の語あり。) さわぐ。(騒。動きて音起つ。聲を揚げて喧し。) からむ。(絡。まとひつく。卷きつく。) いさぎよし。(潔。いさけ彌の轉か。或は發語が。甚だ清し。汚れなし。) しまぬ。(染まらぬ。しみこまぬ。うつらぬ。) もる。(漏。洩。隙を透りて出づ。) 夕暮。(夕方。日の暮。) うねり。(蜿蜒。) やどる。(宿る。とまる。) 木々。(人々といふが如し。多數の木。) うらがれ。(末枯。草木のうらの枯るること。) 年の暮。(年末。)

内容

- 一 自然の美につき、左記の觀念を與ふ。

教授

- 1 季節の推移につれ、自然界の美は、色を變へ、形を變へて、吾人を觀迎す。
- 2 殊に氣候中和を得たる我が國は、花の種類に富む。
- 3 自然の美に接觸し、自然の美を味ふものは、其の身の幸福なり。

1 横斷的排列法に由り、左記の五教時に分つ。

- 第一時 挿畫觀察。
- 第二時 第一節 第二節 讀方。
- 第三時 第三節 第四節 讀方。
- 第四時 第五節 第六節 讀方。
- 第五時 全文 復習。

第一時

要目

- 一 第六卷第二課 四季 復習。
- 此の復習に由りて、四季に關する觀念を喚起し、以て本教授の素地をつくる。

二 挿畫觀察

挿畫觀察を前の四季の觀念に結合し、以て花の季節につき、花ごよみなる題意を授く。

準備

一 挿畫擴大畫

教授

一 第六卷第二課四季の復習。

- 1 一年を四季に分けると何々となるか。(春夏秋冬。)
- 2 一年を月に分けると。(十二箇月。)
- 3 四季と月との割りあては。(三月四月五月が春。六月七月八月が夏。……)

二 挿畫を觀察せしめ、左記の順序に由り、設問を行ふ。

- 1 本文の順序に拘泥せず、花の名を言はしむ。
- 2 各の花の特徴を言はしむ。
 - イ 福壽草 黄色でふくくした花。
 - ロ 梅 白くてさつぱりとした花で、香がよい。
 - ハ 桃 赤くてきれいな花。

- ニ 櫻 うつすらと赤みのある花。花の盛りには、雪が木の枝にかつた様に見える。
 - ホ 藤 紫の房が、風に吹かれる度に。ゆらゆらと動いて見事である。
 - ヘ 朝顔 朝起きると、眠い目をさましてくれる。
 - ト はす 水の中から大きな花。大きな葉。
 - チ 月見草 夕方に咲く花。毎日夕涼のつれ。
 - リ 萩 こまかい小米の様な小さな花がついて、可愛らし。
 - ヌ 菊 花の王である。美しくて、香が高い。
 - ル さっんか 冬さく木の花では、これが一等で有う。
 - ヲ びは 美しい花といふではないが、寒い時に咲く、中々の元氣もの。
- 三 左記の如く、聯想の最も深き関係のあるものより、設問を初め。右の花の季節を順次に、月に分類せしむ。

- 1 今は何月であるか。(十二月。) 今咲いてをる奇麗な花は。(さっんか。)
- 2 天長節の儀式の時に花瓶にさしてあつた花は何であつたか。(菊の花。)
- 3 此の春櫻の花見に行つた。あれは三學年の時であつたか。四年になつてからの事であつたか。

- 4 (四學年になつたばかりの時であつた。) 櫻の花は何月のものであるか。(四月。)
 - お雛様祭りはいつであるか。(三月の節句。)
 - 其の時花瓶に插したのは何の花であつたか。(桃の花。)
 - 桃の花は何月のものか。(三月のもの。)
 - 5 福壽草を買つて来て、樂んだのはいつころであつたか。考へて、何月のものかを言つてごらん。
 - 6 夏休暇中に見た花の中で、一番見事だと思つたのは何の花か。
 - 7 (以下同様に花の月を案出せしむ。)
- 四 右設問を承けて、左記の花時を聽寫せしむ。

三月 桃	六月 かきつばた	九月 月見草	十二月 さっん花
春 四月 櫻	夏 七月 朝顔	秋 十月 萩	冬 十一月 ふくじゆさう
五月 藤	八月 はす	十二月 菊	二月 梅

第二時

要目

- 一 第一節 福壽草、梅。讀方。

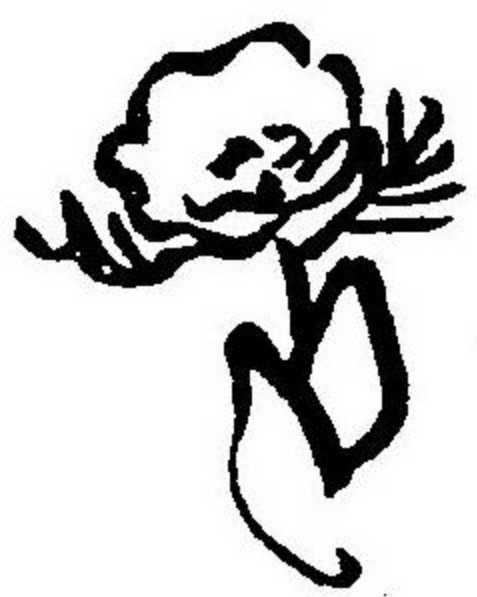
二 第二節 櫻。 讀方。

- 1 文字 香。 紅白。
- 2 語句 黄色の色暖く。 ほころびそむ。

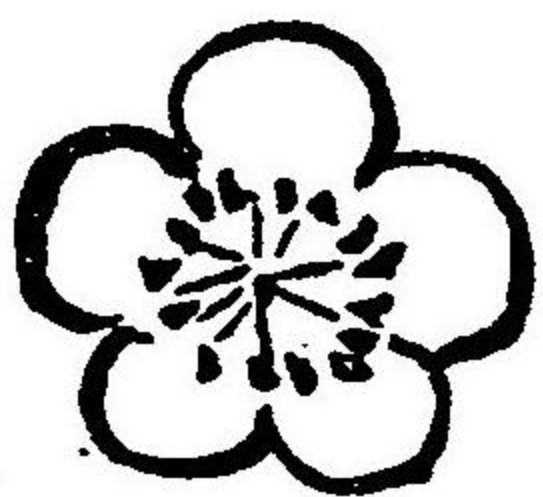
準備

- 一 挿畫擴大畫。
- 二 下圖板畫。

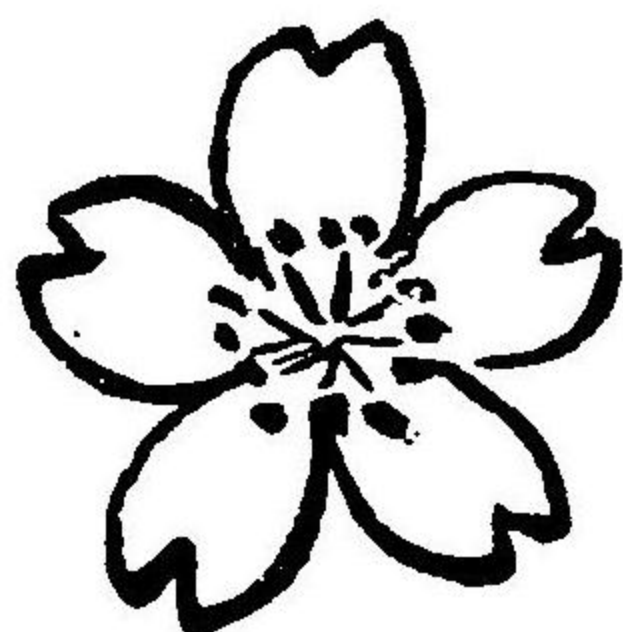
福壽草



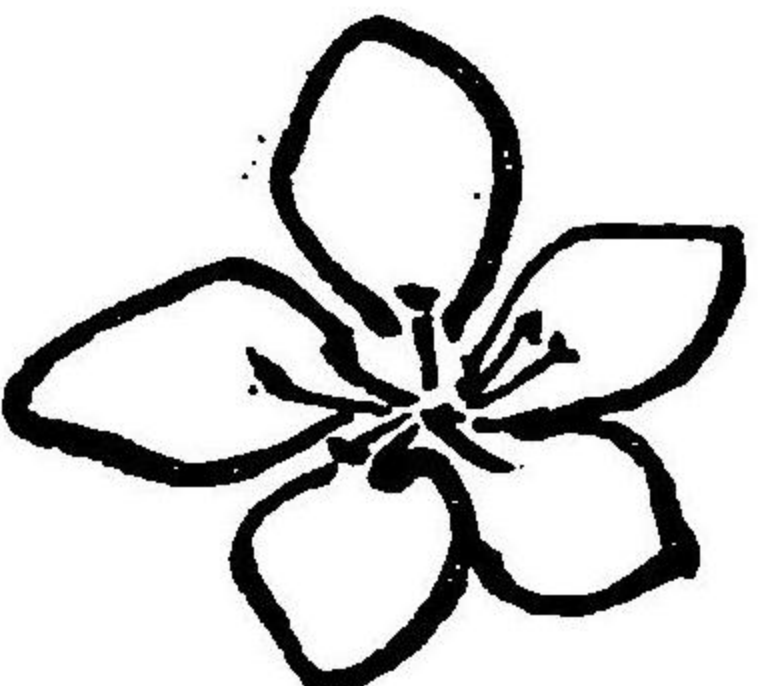
梅



櫻



桃



教授

- 一 左記の設問を行ひ、本教授の豫備とす。
 - 1 一月に咲く花は何か。(福壽草。) 二月に咲く花は。(梅。) 三月の花は。(桃。) 四月は。(櫻。)
 - 2 右の花の中で、色の特別に變つてをるのは何か。(福壽草。) 何色か。(黄色。)
 - 3 梅といへば、直ぐに心に浮び出す可愛いものは何か。(うぐひす。)

4 同様に桃の花といへば、直ぐに思ひ出す事がある。(ひなさま祭。)

二 第一節第二節 範讀兩三回。

兒童をして教科書を離れ、只聞方のみに由りて、文章の趣味を感得せしむ。

三 前の範讀を承け、左記の例に由り、設問を行ふ。

- 1 今聞いた文章は、何々の花の事であつたか。(福壽草、櫻、梅、桃、梨、すもも。)
- 2 最も愉快に感じた句は、何であつたか。(黄金の色の暖く。)
- 3 「黄金の色の暖く。」板書。
- 4 黄金とは金の事である。金の色は何色か。(黄色。) 故に黄色のことをこがねいろといふのである。
- 5 夏はおもに何色の着物をきるか。(白い色の着物をきる。)
それは何故か。(白い色はすべて涼しさうに見えるから。)
- 6 白い色が涼しさうに見えるのに比べて、黄色はどんなに見えるか。(暖かさうに見える。)
それで黄金の色の暖くといつたのである。

三 第一節第二節 範讀。

兒童をして、教科書の文章を視ながら、書取らしむ。

四 反覆熟讀。

五 左記の例に由り、兒童の質問を待ちて、語句の吟味を行ふ。

1 意義の分らない語句は質問なさい。「紅白の花のながめ。」の意義を教へて下さる。

2 右質問板書。

3 さつぱりとた涼しさうな色は何色か。(白。) 其の白の花の咲くのは何か。(梨、李。)

4 燃えたつ様な派手な赤い色の花の咲くのは何か。(桃。)

5 桃の様に眞赤でもなく、梨李の様に眞白でもなく、うつすらと赤みのあるのは何か。(櫻。)

6 紅とは赤のことである。紅色や白色や其の他うつすらとした櫻やまじつて居るから、春の花の景色が、一層引き立つのである。紅白の花のながめのうるはしさといふのは、其の景色のよい事をいつた句である。

六 第一節第二節 達讀。

七 左記の語句を聽寫せしむ。

1 すすしさうなゆかた。暖かさうな色。ふくくしたふくじゆさう。

2 梅にうぐひす。月に花。

3 紅白のまくを四方に張る。

第三時

要目

一 第三節 藤、かさつばた。讀方。

二 第四節 朝顔、はす。讀方。

1 文字 緑。卷。

2 語句 新緑。 藤波。 からむ。 ささかはる。 すがさよく。 しまぬ。 もる。 つゆ 涼し。

準備

一 挿畫擴大圖。

二 略畫練習。

教授

一 第一節第二節 達讀。

二 左記の事項を設問し、本教授の豫備とす。

1 藤かさつばた朝顔蓮の季節。

- 2 右花の美的方面の觀察。
- 三 主要語句を摘書しながら、話述を行ふ。
 - 1 「藤波さわぐ。」暖い春風が、そよ／＼と吹いて来る。藤棚の紫の總が、ゆら／＼と、動く。丁度風に吹かれてさわぐ波に譬へることが出来る。
 - 2 「池水にほふ。」紫白赤のかきつばた、色濃く咲いて、其の優しき姿が水にうつる。丁度池の水から花の香をおくつて来るかと思はれる。
 - 3 「ささかはりつ、いさぎよく。」朝起きる。垣根の朝顔は、早やばつと開いて、「お早うござります。」と挨拶をする。そのうちに、段々と日が照り出す。「左様なら、私はこれで御免を蒙ります。」さつさと、しぼんでしまふ。翌朝になると、次の蕾が代つて、「お早うござります。」にぞりにしまぬ。「蓮の賞美すべきところはここである。いくら、池の水は濁つてゐようとも、花はいふに及ばず、葉莖に至る迄、決して少しの汚れも見せぬ。
 - 4 「巻葉をもる、つゆ涼し、」傘を擴げた様な大きな葉の上に水晶の玉、やがて巻葉の中から、大玉小玉、つる／＼と、漏れ落つる様、涼しい心地がする。
- 四 第三節第四節 範讀。(新出文字綠卷は兒童の質問に應じて、摘書教授す。)
- 五 第三節第四節 反覆熟讀。

- 六 左記の語句を聽寫せしむ。
 - 1 風おこり波さわぐ。
 - 2 櫻のちるささいさぎよし。
 - 3 草の間に鳴く蟲のこえ涼し。
 - 4 卷紙。新緑。紅白のまく。

第四時

要目

- 一 第五節 月見草、萩、讀方。
- 二 第六節 菊。讀方。
 - 1 文字 宴。
 - 2 語句 うねり。 やどる。 千代八千代。 花の宴。

準備

- 一 挿畫擴大畫。

教授

- 一 第一、二、三、四、五、六節 達讀。
- 二 第五節第六節 範讀。
- 三 同上 範講。
- 四 同上 達讀。
- 五 左記の語句を聽寫せしむ。
 - 1 水にやどる月。池に月をうかぶ。
 - 2 千代八千代と祝ふ雀。

第五時

要目

- 一 第七節 さんか、びは。讀方。
- 二 全文 復習。

準備

- 1 語句 木々。うらがれ。年の暮。
- 一 挿畫擴大畫。

教授

- 一 第五節第六節 達讀。
- 二 第七節。範讀。
- 三 同上 範講。
- 四 同上 達讀。
- 五 左記の語句を聽寫せしむ。
 - 1 木々、山々、家々、人々。
 - 2 年の暮、日の暮、夕暮。
- 六 全文復習。
 - 1 達讀。
 - 2 花の頃を月にて答へしむ。(二月は福壽草、二月は梅…の類)
 - 3 花の頃を四季にて答へしむ。(春は櫻桃梨李藤の類。)
 - 4 諳讀。
 - 5 左記の語句を聽寫せしむ。
 - イ こがねの色の暖く。 卷葉をもるゝつゆ涼し。

- ロ はころびそめて山々の。いつしか木々もうらがれて。
- ハ かをる梅が香。池水にはふ。
- ニ 年のはじめ。年の暮。
- ホ 花にやどるちやうちよ。葉にやどるつゆ。

第十二 マッチ (四時間)

形式

一 文章 説明文

- 第一節 マッチの便利。
- 第二節 マッチの製造の手数。(一)
- 第三節 マッチ製造の手数。(二)
- 第四節 マッチの輸出。

- 二 文字 價アタヒ 直段 更カシラ(類字 既教の便)ベシ 造ザウ(類字告 既教。訓讀ツクル 既教。) 氣キ(音讀キ 既教。) 頭カシラ(讀替アタマ 既教。) 藥クズリ(藥品七卷六十三頁にあり。) 要ユウ(面の下に女。面を面と書く西との比較。) 凡オヨソ(既教の丸との比較) 輸ユ(輸は音シユなれども文部省は輸入と讀ませたり。) 圓エン(略字円あり)

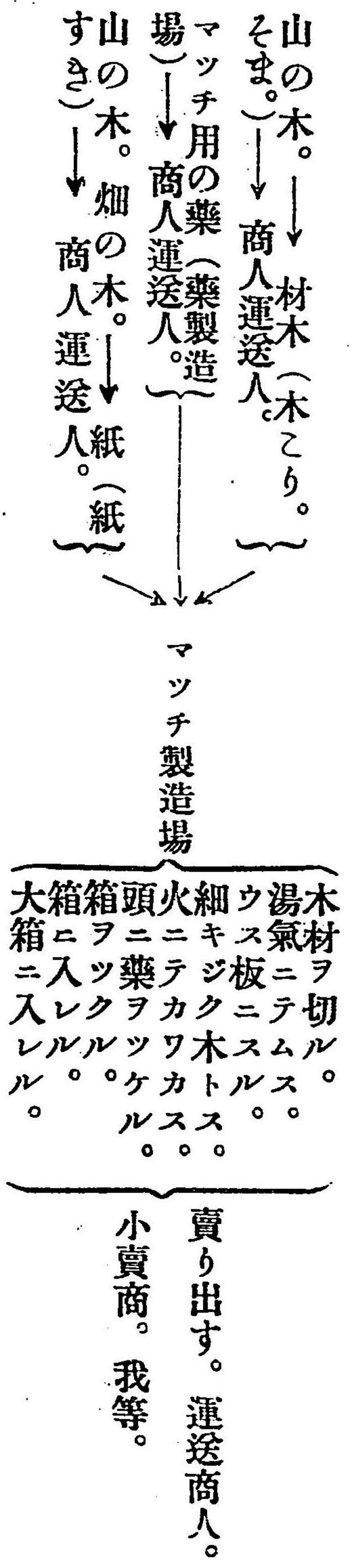
三 語句

平生(ふだん) つね) 價(代金) 直段) サ程(それほど) そんなに) 便利ナルニ驚ク。驚クベキ手数(普通ならざる物に對し、「驚ク。」を用ゆる事多きを知らしむ。) 木片(木の切) 今更に(ことあたらしく。いまあらためて。) チク木(マッチの木の部分をいふ。) 手ニ入レ(手に入れる。自分のものにする事。) 人手ヲ要ス(人手がかかる人手がいる。) 凡ソ(まわごと) 輸入品(外國より我國に賣り込む品物。) 輸出(外國へ賣り出す事。) 重要ナルモノノ一トナレリ。(ひろひろある品物の中で、そのおもなるものの中の仲間の一となつた。) 内地(外國に對する語。内國。) モツバラ(專主として おもに)

内容

- 一 火の必要、發火の方法。マッチの便利につき第五卷第十九課「炭と油」の内容と關聯して左記の事項を教授す。
 - 1 火食するものは人間に限る。
 - 2 發火の方法 (イ)木片と木片との摩擦にて (ロ)火打石と火打金 (ハ)マッチ。
 - 3 昔の發火法に比して價安くして且つ大に便利なり。

二 製造法の大要、及び分業の概念につき、左記の事項を教授す。



三 沿革 外國の發明なること。五六十年前始めて我國に來りたること。國人一般に用ふるやうになりたるは、三十年前頃よりなること。今は我邦のマツチは一大勢力を以て東洋諸國に賣り出して居ること等を説明すべし。

教授

左の如く四時間に分ちて教授す。

- 第一時 第十二全體の内容大意 第一節の讀方。
- 第二時 第二節第三節 讀方。
- 第三時 第四節 讀方。
- 第四時 全文總括、及び總練習。

第一時

要目

- 一 マツチに關する内容の大意話述。
- 二 第一節。マツチの便利 日讀方。
 - 1 文字。便。更。
 - 2 語句。一ダース。足ラズ。カクノ如ク。サ程。今更。平生。

準備

- 一 (昔の發火器)、木片二個。火打石、火打金、火口。
- 二 マツチの種類一、二種。

教授

- 一 發火器に就いての大要。
 - 1 木片と木片とをすれば、熱を生ずること。焼ける如き臭を發する等の實驗。
 - 2 金石、火口より發火の實驗。
 - 3 マツチにて發火の實驗。

- 4 三發火法の略畫。
- 二 左記の語句を板書教授す。
 - 1 價。三四錢。一箱。足ラズ。便利。平生。サ程。昔。驚カル。更に。
- 三 第一節 朗讀
- 四 左記の語句につき、練習應用。
 - 1 我等の平生用ふるマッチほど便利なるものなかるべし。
 - 2 君の力の強いことは知らないでもなかつた。しかし、さ程には思はなかつたが、今日力くらべを見て、今更に其の強いのに驚いた。
 - 3 一ダースの價がわづかに三錢。
 - 4 更。便。使。
- 五 第一節 達讀
- 六 第一節の大意話述。

第二時

要目

- 第二節 マッチの製造(一) 第三節 マッチの製造(二) 讀方。
 - 1 文字。造。氣。頭。藥。要。
 - 2 語句。諸子。ムシ、チク木、木片、要ス。

準備

十二個を一包にしたるマッチ。

教授

- 一 第一節 復習。
- 二 第二節 教授。
 - 1 次の事項につき、設問を行ひ、豫備とす。
 - 1 火を使ふことの出来る動物(第五卷第十九「炭と油」の第一節)
 - 2 大昔の火の出し方 其の後の火の出し方 近ごろの火の出し方(同上第二節)
 - 3 マッチの價及び使用の便利なる事。
 - 2 摘書教授。

製造場。驚クベキ手數。湯氣。木片の頭に藥。多クノ人手ヲ要ス。
 - 3 範讀。

- 4 黙讀 朗讀 齊讀。
- 5 意義の吟味。
- イ 諸子。製造場。湯氣。木片。
- 6 第二節の要領を話さしむ。
- 三 第三節の教授
 - 1 次の問答を爲して豫備とす。
皆さんのうちでは、此のマッチを何處で買ひますか。
其の小賣店は何處から仕入れるのでせうか。
製造會社で用ふるマッチの材料は何でせうか。
それ等の木は何處から持つて來るのでせうか。(北海道地方及び其の他遠くの山地より)
山から誰が木を切り、誰がそれを運送するのでせうか。
マッチ箱張の内職人の話等に就いての問答。
- 四 文字及び語句の摘書教授。
要ス。數へ上グレバ。要スルカヲ知ラズ。ソマツニハ使フベカラズ。
- 五 範讀

- 六 朗讀 齊讀
- 七 意義教授。
- 八 大意の話述。
- 九 第二節第三節 通讀
- 十 左記の語句を聽寫せしむ。
 - 1 マッチの製造場。いそがしさうに働く。
 - 2 木の頭につけてある薬と、箱の外がはにつけてある薬と、すれあつて、火が出る。その火が木にもえうつる。
 - 3 湯氣でむす。
 - 4 どれほどの手数を要すると思ふか。
 - 5 一本のマッチも、何十人の人手を要したるものであることを忘るな。

第三時

要目

第三節、マッチに関する沿革の概要。讀方。

1 内容、外國に於て凡そ百年前の發明。我が國人の用ふるやうになりたるは明治二、三年頃なり。我が國にて製造を初めたるは明治八年。今は年々の輸出一千萬圓。

2 新出文字。

凡ソ、輸入、圓、

3 教授上の注意語句、

發明セラレタルモノナリ。(發明は、物品等の造り方を工夫して、今まで無つた物、出来なかつた物を、造ることの出来ること。)モツバラ、(わきの方の事をば見ずに、一方の方にはかりの意)内地(國內の意と、臺灣、北海道、樺太をのぞきたる我が國を指すの意と二様の意義あり。)重要ナルモノノ一ツトナレリ。

3 語法の二三。

マツチハ……發明セラレタルモノナリ。我が國ニテハ……輸入品ヲ用ヒタリ。
今日ニテハ……製造ハナハダ盛。今日ニテハ……輸出一千萬圓ノ金高ニ達シ。今日ニテハ……輸出品中ノ重要ナル……一ツトナレリ。
初ハ……輸入品ヲ用ヒタリシガ……内地ニテモ……製造スルニイタレリ。

教授

一 豫備としての内容教授

- 1 火を出す道具には何々ありや。
- 2 マツチの無かりし頃は如何にして火を出したりしや。
- 3 マツチも火打道具もなかりし時代には何を以て火を出したるか。
- 4 マツチは外國より渡り來りしものなり。
- 5 我が國の人々が使用するやうになりたるは、明治になりてよりのことなり。
- 6 外國にて之を製造することを發明したるは、凡そ三百年前のことなり。
- 7 我が國にて之を初めて製造したるは明治八年なり。
- 8 明治二十年頃には我國の輸出盛になれり。
- 9 此の頃よりして外國製造のマツチの輸入は無くなれり。
- 10 近年は輸出するマツチの價一年に一千萬圓といふ金高になれり。

二 第四節 讀方

1 範讀なしつゝ左の新出文字の板書教授。

凡 輸入 圓(之れは讀本にては新出なれど算術科に於て既に教授せり。こゝにては特に發音と書方とに注意す)

- 2 第二回目の範讀の際、左の語句は指名して、兒童に讀ましむ。
今ヨリ凡ソ百年前。發明セラレタルモノナリ。輸入品ヲ用ヒタリシガ。之ヲ製造スルニイタレリ。我ガ國輸出品中ノ重要ナルモノノ一ツトナレリ。
注意。兒童指名は、一句を數名に讀ましむる様にすべし。
- 3 第三回の範讀は讀方の模範を示す。
- 4 默讀 各兒童をして一回之をなましむ。
- 5 質問 默讀中に讀み得ざりし所を質問せしめ、兒童をして答へしめ、正しきときは。それによりて、質問したる兒童に讀ましむ。
- 6 朗讀。指名兒童、數兒童をして數回よましむ。
- 7 齊讀 一回。

四 文語口語の對照

- 1 發明セラレタルモノナリ。
發明されたものです。
- 2 用ヒタリシガ。
用いたのですが。
- 3 製造スルニイタレリ。
つくるやうになりました。
- 4 ハナハダ盛ニシテ。
たいそう、盛で。

- 5 輸出スルモノノミニテモ。
賣り出すものばかりでも。
- 6 重要ナルモノノ一ツトナレリ。
おもなるものの一ツとなりました。

五 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 おぢいさんの子供の時には、マッチはなかつたさうだ。
- 2 火打石と火打金とでかちく。
- 3 ぼくは、もつぱら、わしじるしのえんびつを使ふ。
- 4 重要なさうだんがある。すぐに來て下さい。
- 5 マッチの發明は、今から凡ソ百年前の事である。
- 6 輸入品と輸出品。内地と外國。

第四時

要目

- 一 第十三 全體の總括練習。應用
- 二 小題目の命名
- 三 本文簡約

教授

一五二

- 一 文字の書取復習
價三四錢。更。製造場。湯氣、頭、藥、要ス。凡。輸入。
- 二 全文讀方復習
一兒童に二三句づ、朗讀せしむ。朗讀したる者に向つて一二の質問をかけて意義を言はしむ。
- 三 達讀練習
- 四 左記の句にき意義を練習す。
 - 1 カクノ如ク便利ナルモノハナカルベシ。
 - 2 今更ニ其ノ便利ナルニ驚カル、ナリ。
 - 3 諸子ハイマダマツチノ製造場ヲ見タルコトナカルベシ。
 - 4 之ヲ思ハバ一本ノマツチモソマツニハ使フベカラズ。
 - 5 外國へ輸出スモノノミニテモ、一年間一千萬圓ノ金高ニ達シ、我が國輸出品中ノ重要ナルモノ、一ツトナレリ。
- 五 小題目の命名
注意。右は誦するまでに練習せしむ。

第一節 マツチの便利。

第二節 マツチ製造法。(一)

第三節 同上 (二)

第四節 マツチの輸出。

六 左記の例に由り本文簡約。

マツチハ價安クシテ便利ナリ。

之を製造スルニ山ヨリ木ヲ切出シテ我等ノ手ニ入ルマデ何十人ノ手ヲ要スルカヲ知ラズ

初ハモツバラ輸入品ヲ用ヒタリシガ、今ハ我が國ノ製造盛ニナリテ一年ニ一千萬圓ノ品ヲ輸出スルニイタレリ。

参考

- 一 黃磷マツチ。黃磷と鹽素酸加里(或は硝石、鉛丹)とを用ひたる品。單に摩擦によりて發火す。赤磷マツチ。日常用ふる品はこれなり。軸木に塗るは、鹽素酸加里、酸化アンチモニー。重クローム酸加里、クローム酸バリウム或は硫黃等。箱に塗るは赤磷に硫化鐵、及硝子粉末等。
- 二 我が國のマツチ製造業、清水誠(金澤藩士、明治三年藩命を以て佛國に留學、後、文部省の留學生となり、明治八年歸朝)氏と吉井友實氏とが明治八年東京三田四國町吉井氏の別邸内に假工場

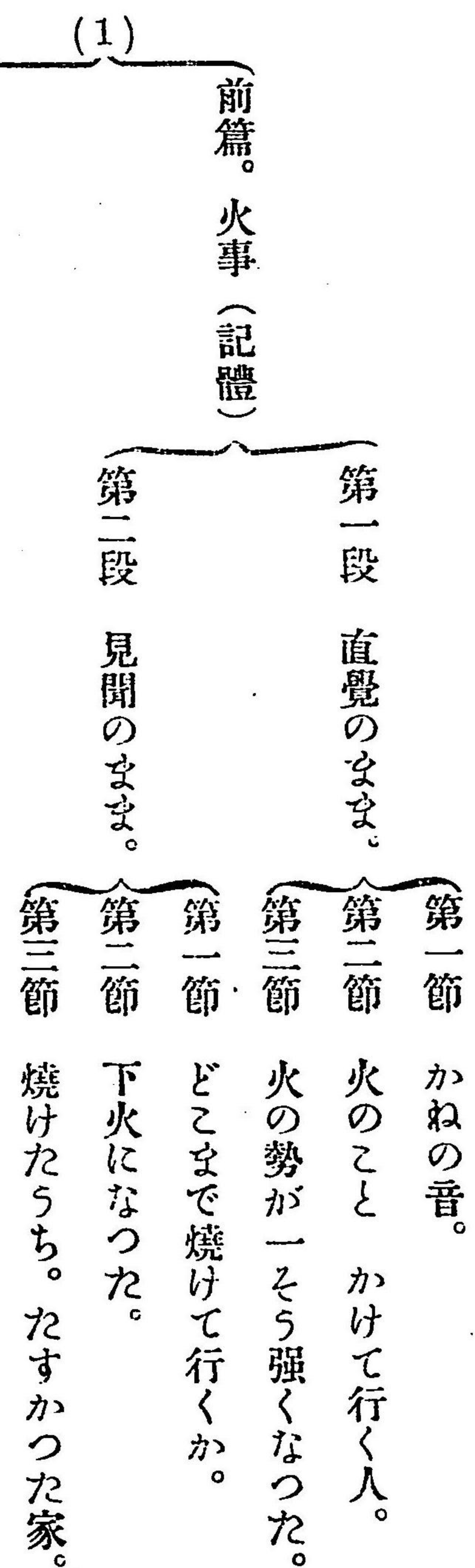
一五三

を設けて製造したるを以て始とす。明治九年本所柳原町に工場を建設し清水氏社長となり新燧社といふ。十年九月横濱より輸出上海に於て試賣大に好評を得たり。安全マッチ即ち今日日常用ふる赤燐マッチは清水氏が明治十一年歐洲漫遊の際に發明したるものなり。十四五年の頃より、神戸大阪地方にもマッチの製造業盛ど輸出のみにて、輸入品なきに至れり。十四五年の頃より、神戸大阪地方にもマッチの製造業盛に起り、明治二十四年には輸出高四萬圓に達し、近年は壹千萬圓以上に達せり。

第十三 火事 (四時間)

形式

一 文章 記體文 説明文。



後篇。火の利害(説明) 第一段 火の利用。

第二段 火の取扱につき注意。

(2) 文章の構成

前篇後篇の二大段に分ちて、書きたる文章なることは前表の如し。

前篇の第一段、先づ直覺の鐘聲より筆を起す。讀者をしてチャンチャンの音を耳にするの感わらしむ。

とやんくと聞ゆる。かねの音、火事だ火事だと呼ぶ聲。高張を持つてかけつける人、どこまで焼けたといふとりくの噂、火の勢は一層強くなる、火事場でさわぐ人聲。惨烈の状を寫し得て餘あり。

前篇の第二段

かわきさつた上にはげしい風、どこまで焼けて行くか分らない。さあかうなると心配だ、先づ自身のうちとは考へる、ところが幸にも風上、次には叔父さんのうちの事が氣にかゝる、心配しながら見てゐるもの、心を巧みに寫せり。そのうちに下火になつて、やれこれと心をゆるめる様、しかしまだ氣にかゝる叔父のうちの安否

見舞に行つた兄が歸つての實見談で幾分か安心したといふ様、何れの記述も真に迫る。後篇。前篇に於て火事に關する記事は終りぬ。これ丈を以て一篇の文章とするも不足する所無し。されど作者の本意は「火の恐ろしさ。」を兒童に知らしめんとするに在り。これ前篇をかり來りて火事の光景を擧げて、その恐ろしさを感じしめ、後篇に入りたるなり。第一段に於ては利用の多きこと最も缺くべからざることを説き。第二段に於てその反面の最も恐ろしきことを説くに。「聞けば此の火事は……」を挿入して前篇と後篇と相俟つて一篇の文となるやうに注意せり。この「聞けば云々……」の語を前篇第二段の第三節に加へざりし所に作者の苦心は知られたり。

二 文字

散ズル(昔ムカシと文との結合) 類字 教オシヘ 枚ハシ 敷シキ 敵テキ 既教 吳ゴ 服フク(運筆順注意) 勢イキホヒ 叔父オジ(叔は上小又の結合) 止小又と誤らぬ様注意) 藏ゾウ 録ロク(七卷七十六頁の縁と比較) 無ム 扱アツカフ(手) 及オヨブ角カド(音讀カラ訓讀ツノ) 既教) 夜ヤ(訓讀ヨル ヨ 既教) 上カミ(音讀ジャウ訓讀 ウヘ アガル 既教) 風上カザカミ(音便カザカミに注意) 戸コ(訓讀 ト 既教) 切サイ(音讀セツ 訓讀キル 既教) 有イウ(運筆順既教の右と同様なり) 多タ(タタの結合) 訓讀オホシ 既教) 煙草タバコ(訓讀ケムリ クサ 既教)

三 語句

あちらの空がまつかだ。(夜の火事たることが、わかる。) 弓張ユミハリチャウチンの略なり。(飛んで行く。(とぶやうに、はやくはせ行くこと。) 火元ヒモト。火事の火を出した家。仕合に 幸に(異音同意語)かわきさる(かわいた上にもかわく) 風上カザカミ(音便カザカミ風の吹いて來る方のこと) これに對し風下の語あり) 下火ゲカ(火事の火の勢の衰へかけること) 戸棟カド(建物を數ふるに用ふる接尾語) 一切(すべて) みんな ことごとく 残らず(すつかり) ぶじ(無事) 無難 事なくてすむ) 利用 有用(利用はやくに立たせて用ふること) 有用は役に立つこと) はげしい風(ひどい風) きつい風) 取扱トルカ(つかひかた) 多分(大てい) 大が い 大方) 聞けば(聞く所に由れば)

内容

- 一 火事に關し左記の事項を教授す。
 - 1 慘烈なる火事場の様。
 - 2 火事の場合の注意。
 - 3 火の恐ろしさ。
 - イ 大火事の話。やけどの話。ランプの過失より起る死傷又は火事等の事。



ロ 火の取扱には最も注意すべきこと。

教授

左記の四時間に配當して教授す。

第一時 はげしい火事。(四十三頁二行迄。)

第二時 前篇の終、火事の結果、後篇の第一段、火力の利用。(四十四頁四行迄)

第三時 後篇の第二段。まぢがへば、恐しきものとなる。(終迄)

第四時 總練習及び文章の構成。

第一時

要目

(注意) 本課は作者が、十二歳位の子供の記述したる文として取扱ふ

一 チャンデヤンデヤン。(四十一頁五行迄) 讀方

二 かけて行く。(四十一頁九行迄) 讀方

三 火の勢が強くなつた。(四十二頁四行迄) 讀方

四 どこまで焼けるか。(四十二頁八行迄) 讀方

1 文字 散 角 吳服 勢 夜 上 安 叔父

2 語句 弓張 かわききる はげしい風 風上

準備

一 火事場の様を表はせる掛圖。

教授

一 文字板書教授。

火事。(既教)散。弓張(既教)後(ゴ。アト。ノチ。ウシロ。)火元(既教)本町通(本マ
チドウリ。木チャウドウリ)角(ツノ。カク。カド。)呉服屋 火の勢。今夜 風上(既教
のカゼカミより導く)仕合(既教)安心、(ヤスイコ、ロ 既教)叔父

二 範讀

三 讀朗 齊讀(反覆熟讀せしむ)

四 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 「火事だ火事だ。どこだらう。あまり遠くはないらしい。」此の句は誰が言つたのか。(誰と
はなし、かく叫ぶ聲が聞える、それを作者が寫したのである。)
- 2 此の火事は一日のうちのいつの事であるか。(夜の事。)それはどの句でわかるか。(「あちら
のそらがまつか……弓張をもつて……」の句でわかる。)
- 3 「又隣へうつつたのかも知れない。」なぜこんな想像を起したか。(火の勢が一そう強くなつ
たのを見て想像した。)
- 4 どんな時に大火事になり易いか。(長い天氣つゞきで……はげしい風の時。)
- 5 同じく近火でも、心配の多い家と少い家とある。それはどうした譯でその相違があるのか。

(風上にあたる家と、風下にあたる家とで違ふ。)

五 達讀。

六 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 風が吹く。花が散る。
- 2 私のうちには風上ですから安心ですが、風下にあるうちはしんばいな事でせう。
- 3 本町通の角の呉服屋も焼けたさうだ。
- 4 叔父さんの中はどうかであらう。

第二一時

要目

前篇の末段、火事の結果。と後篇の第一段、火力の功用。

- 一 にいさんの話。(四十二頁九行迄) 讀方。
叔父さんの家も焼けぬ。役場も焼けぬ。米屋の土藏まで焼けてとまつた。
- 二 火の利用。(四十四頁四行迄) 讀方。
一日も無くてならぬもの。食物。工業。さかい。汽車。汽船。

準備

一 火事場の様を表はしたる掛圖。

教授

一 文字板書教授。

歸り、(既に教へたるなれど書き方の困難なるもの、注意せしむべし。) 土藏。(藏はよく人名にも用ふることを教ふ。) 二棟。(木へんに東。) 一切(イツサイ) 書類。毎日。工業。種々。程。

利用。記録類、(録は既教の録と比較す)

二 範讀。

三 朗讀 齊讀。

四 語句の吟味及び應用。

1 「幸に。」これと同意の語が四十二頁にある。何といふ語か。(仕合に。)

四十二頁の「仕合に。」と位置を轉換して、語つてごらん。

2 「二棟。」と類似の語がある。何か。(四五十戸。)

3 「一切。」を他の言葉に言ひかへてごらん。(みんな。すつかり。ことごとく。)

4 「利用」の語を應用してごらん。(犬を利用して、車をはかせる。)(わらを利用して、紙を製

造す。)

五 達讀。

六 左記の語句を聽寫せしむ。

1 畑野幾藏。

2 重要な記録類。

3 一日も無くてはならぬ火。

4 何もかも一切焼いてしまった。

第三時

要目

後篇第二段。火の恐ろしいこと。(終迄) 讀方。

1 火の取扱をまちがへば大へん。

2 烟草のすひがらが火事になる。

3 火事は實に恐ろしい。

4 火の用心が第一。

一 文字板書教授。

- 1 用が有る。用が無い。有用な火。
- 2 多い。少い。多少。多分。
- 3 烟草の小賣店。一服の烟草。
- 4 大切に取扱ふ。取扱がていねい。

二 朗讀 齊讀。

三 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 此の火事は何から起つたのであるか。(烟草のすひがらが元だらうといふ話である。)
- 2 此の大火事の火と、火事を起した元のすひがらの火とを比べてごらん。
- 3 わづが一服のすひがらが、こんな恐ろしい大火事となつた譯は、何であるか。(火の取扱を大切にしなかつたからである。)

四 達讀。

五 左記の語句を聽寫せしむ。

- 1 世の中に用のないものは一つもない。
- 2 利用さへすれば何でもやくにたつ。

- 3 利用しなければ何でもやくにたゝぬ。
- 4 手へんに及といふ字は扱と讀む。
- 5 多分。烟草。有用。

第四時

要目

第十三の總練習及び文章の構成。

教授

一 達讀の練習。

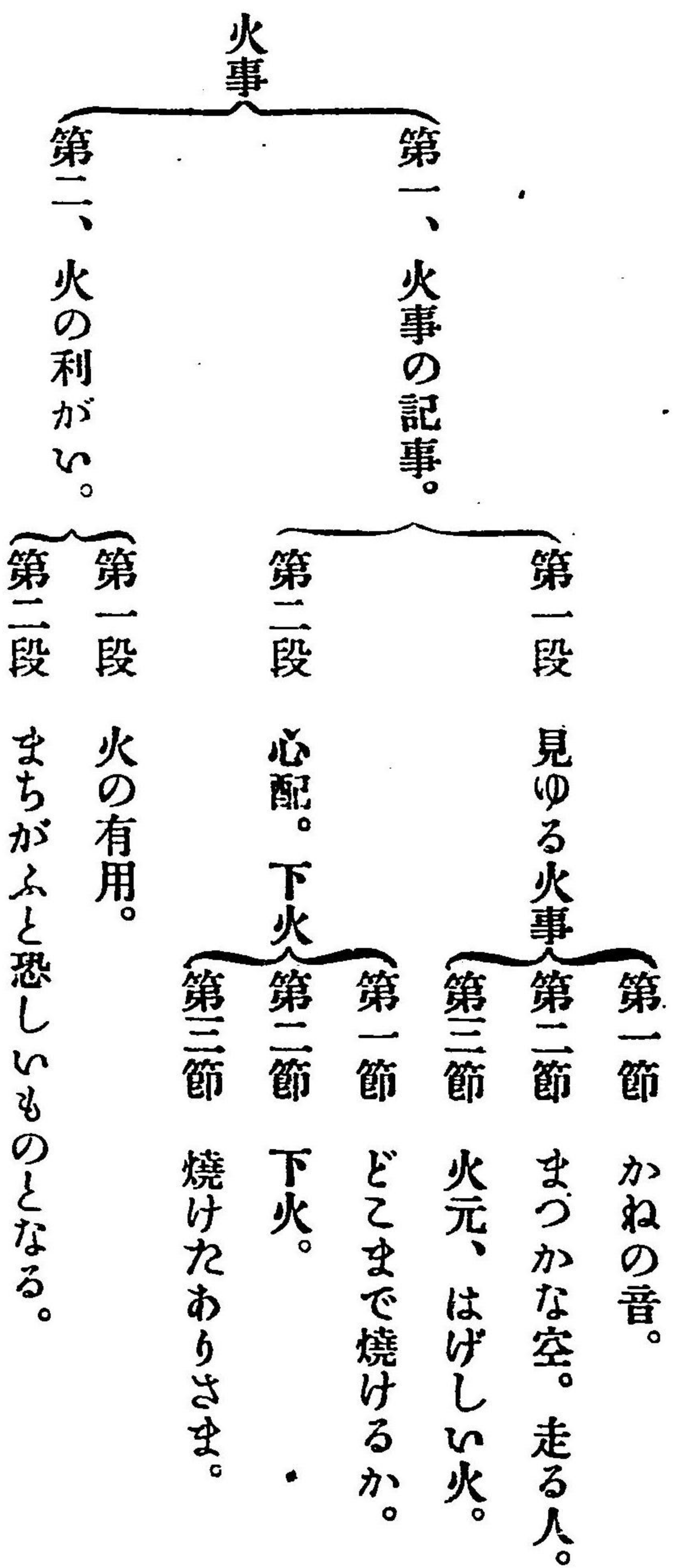
- 1 一兒童に一節づつ讀ましむ。他兒童をして誤讀を訂正せしむ。
- 2 劣等生の爲めには特に他兒童の讀みたる所を直に讀ましむ。

二 書取練習。

- 1 主要なる語句を讀み舉げて板書せしむ。(指名兒童)
- 2 他兒童に之を視寫せしむ。

三 文章の構成。

前記の説明を参照すべし。



四 大要の叙述。

前記の文章の構成の説明に準ぜしむ。

五 文字語句の應用。

鳴く。木の葉散る。紙を張る。着物の裏。机の角。夜中。戸數。大きな藏の戸。等。

第十四 電報

形式

一 文章 對話體説明文。

第一段 電報「お前一つ書いてごらん。」まで。

第二段 電報文の書き方。「ていねいに書くことはいらない。」まで。

第三段 電報文の字數。「十五字になるやうに書いてごらん。」まで。

第四段 出來た電報文。

〔注意〕 本課は知解を主とする説明文なり。説明文は兎角無味乾燥に陥り易き嫌あり。この短所を補はんとて對話の形をとりたるなり。

二 文字。

電報デニバウ（つくりの方、報と服と同じ。） 伯父オヤヂ（人扁に白。） 今朝コンチャウ（ケサ）。 信シン。（人の言） 頼ライ

三 語句。

火事見まひ。 御安心なさる様に。 長過ぎる。 成るべく。 書くにも及ばない。 昨夜、に
ごつた字は二字に數へる。（すんだ字。清音の字。濁音の字）

伯父オヤヂ（前課の叔父と對照 父母の兄には伯父を用ひ 弟には叔父を用ふ）

内容

一 電報につき左記の觀念を與ふ。

- 1 電報は郵便よりも早く用事達して便利なる事。
- 2 電報文の綴り方。
 - イ 成るべく短く分り易くかくこと。
 - ロ はぶいても分る詞は、はぶくべきこと。
 - ハ 敬語を省くべきこと。

参考

- 一 電報取扱時間 自三月一日至十月三十一日午前六時ヨリ午後十時マデ。自十一月一日至翌年二月末日午前七時ヨリ午後十時マデ。但シ至急電報ハ右ノ時限ニ關ラズ取扱フ。
- 二 一音信 片假名十五文字以内(十五字マデガ一音信)濁音ノ假名ハ、二字ニ數フ。一二三四五六七八九十ノ字ハ片假名ニ準ジテ數フ。但シ頼信紙ニ書クトキ片假名ヨリハ大キク書クベシ。
- 三 受信人住所氏名 假名ニテ書クヲ正則トス。漢字ニテ書キタルトキハ必ず振假名ヲナスベシ。
- 四 配達 受信人ノ居住地ガ受信電信局ヨリノ距離一里以内ナルトキハ電報料ノミニシテ別ニ配達料ヲ要セズ。

五 別使配達 受信人ノ住所、受信局ヨリ一里以上ナルトキハ特ニ別使配達トシテ發信局ニ申込ムベシ。然ラザレバ。受信局ヨリノ配達ガ郵便ニテノ配達トナル。

内 國 電 報 之 部

種 別	和 文		歐 文	
	基本(片假名十 五字以内)	累加(五字以内ヲ 加フル毎ニ)	基本(五語 以内)	累加(一語ヲ加 フル毎ニ)
一市町村内發受ノモノ	十 錢	三 錢	十五 錢	三 錢
小笠原島、臺灣、樺太ト其以外ノ 本邦各地トノ間并小笠原島、臺灣 樺太相互間發受ノモノ	四十 錢	十 錢	五十 錢	十 錢
前二項以外ノモノ	二十 錢	五 錢	二十五 錢	五 錢

○ 通常電報料

○ 至急電報料 一通毎ニ
官報ハ通常電報料ノ二倍。
私報ハ通常電報料ノ三倍。

○ 時間外取扱料 一通毎ニ 金二十錢。

○ 別便配達料

著信局所ヨリ二里以内ハ 一通ニ付 金二十錢。
著信局所ヨリ二里ヲ超ユルトキハ一里以内毎ニ 一通ニ付 金十五錢。
(注意) 臺灣島内ニ於テ配達スル料金ハ本金額ノ二倍トス 樺太島内ニ於テハ別紙配

教授

達ヲ爲サズ。

左の如く四時間に配當して教授す。

- 第一時 第一段 第二段。
- 第二時 第三段 第四段。
- 第三時 全體の讀方書方練習。
- 第四時 電報の書方。

第一時

要目

- 一 第一段。伯父から電報。讀方。
 - 1 電報は早い。
 - 2 新聞と電報。
- 二 第二段。返事の電報。電報の書き方。讀方。

準備

電報頼信紙數十枚。

教授

一 豫備及び板書教授。

第十三は火事の話がありました。其の火事は和田一郎さんの町でした。東京に一郎さんの伯父様があります。其の伯父様から電報が來ました。其の文は。(板書して)

ヤケヌカ ケガ ナイカ カナメ。

カナメといふのは伯父様の名です。今日は之を讀みたる一郎さんとその父上との話の所を教へます。

次の字さへ覚えれば、あとは既に習つた字ばかりです。

伯父(叔父との區別前述参照)今朝(コンテウともケサとも讀む。)

二 範讀「お前一つ書いてごらんまで」

- 1 優等生をして讀ましむ。數名數回。
- 2 二兒童の朗讀。
特に教壇に立ち、一名は父、一名は一郎として之を對話的に讀ましむ。

三 一郎の電報文。

- 1 特に板書して。之を讀ましめ。これが一郎さんが書いた文である。父上は之を見てどんなに直したであらうか。皆さん考へてごらんの間をかけて、考へしむ。
- 2 第二段の讀方（次を讀めば、父上が、どんなに直したかが分る云々と語りて後に）優等生をして讀ましむ。一回。次に注意せよと示しつゝ、板書のゴアンシンクダサイに朱線を引き省きて可なることを教ふ。
兒童をして數回朗讀せしむ。
- 四 對話的朗讀練習。
二人づつをして之を朗讀せしむ。
- 五 書取の練習。

第二時

要目

- 一 第三段 一音信の字數。
 - 1 省いても分る語は省け。
 - 2 一音信は十五字（但し假名の字數なり。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十も假名と

同じに數ふ。

二 第四段 よゝ電報の文。

教授

- 一 復習
 - 1 板書復習。前時の所及び本時間の。
昨夜、御存じ 數へ。
 - 2 朗讀復習 前時に教へたる所を一回。
- 二 新出文字語字。

一音信（イチフォンシン。音はオトと讀む。音信はオトツレ。） 賴信紙（ライシンシ。デンシンをたのみ紙。實物を示して教ふ。）
- 三 讀方及び意義。
 - 1 一郎の第二回作の電信文板書。
 - 2 範讀 其の際板書のサクヤ、ウチ。を消して教ふ。
 - 3 兒童をして數回讀ましむ。
- 四 第十回 全文の達讀。一回。

五 書取練習。

第三時

要目

第十四電報、全體の讀方、書方練習。

一 讀方練習 特に二兒童を教壇に立たしめて一名を父、一名を一郎として、對話的に讀ましむ。三回。

二 朗讀の練習。

1 一人毎に之を爲さしむ。

2 數兒童をして之を爲さしむ。

3 齊讀的に之を爲さしむ。

三 書方練習 主なる文字の書取。

教授

一 板書復習。

1 摘書しながら之を讀ましむ。

2 板書文字全體の讀方練習。

3 板書文字は後に至りて暗書せしむることを命令す。

二 對話的朗讀 要目の所に述べたる通り。

三 朗讀の練習。

其の方法とその長句とは要目の所に記したる通り。

四 書取練習。

1 先程黑板に書きたる語字は幾つなりしか。その中の一つを書き得る者。

2 先づ劣等の方よりして一人に一つづゝ書かしむ。衆兒をして之を批評せしむ。

3 斯くして全くを板書せしむ。兒童の忘れたる文字は特に思ひ出すやうにつとめしむ。

4 知らざるもの、誤りたるものは、特に假名書になさしめ。次に本を開きて發見せしむ。

5 其の發見したる文字を更に暗書せしむ。

五 電信文の書き方。

一郎の父の教へたる大要を話さしむ。

一郎の電信文の誦讀。

第四時

要目

電報に關する大要。

- 一 電報文の書方。
- 二 電報文の讀方。
- 三 電報の打ち方。
- 四 電報に關する規則。

準備

- 一 電報頼信紙、數十枚。
- 二 電報送達紙に記したるもの。(受取たる電報。不用になりたるものを借り集める。)

教授

- 一 一郎さんの電報の文。
- 1 サクヤノウクワジニウチハヤケマセンデシタシンルキミナブジゴアンシンクダサイ。四十二字。

2 サクヤウチハヤケナイシンルキミナブジ

十九字。

3 ヤケナイシンルキブジワダ

十五字。

二 頼信紙の書き方。

1 一郎の書きたるもの(四十八頁にあり)を讀ましむ。

東京麴町區竹平町一(タケヒラ町一番地。これは文部省と同番地なり)渡部要(特に假名を附けたる理由を説明す。)次に本文を讀ましむ。にがり字の次は一つわけてある理由の説明。次に東區平野町五丁目和田武雄を讀ましむ。

2 斯くの如く書くべき規則なることを教ふ。

三 電信の文案。

左の用件を電信文に綴らしむ。

1 遠くに行きたる父に、昨夜火事があつたが、うちには何のさわりも無かつたことを知らせる。

作例。ウチハヤケナイ。ブジ 十一字。名を入れても十五字以内。

(注意) ウチハの三字を何故に省き得ざるか。これ昨夜此の地に火事のありたるを父は未だ知らざるべければ。ウチハヤケナイとして、「ははあ、昨夜火事があつたが、うちから遠い所であつたのか。それで焼けもせず、皆に怪我もしなかつたといふのか」と思はしめ、さとりしめんとて

なり。唯單にヤケナイと書きては餘りにだしぬけなり。

2 今出る汽車に乗つてかへります

作例。イマノキシヤデ カヘル。 十一字。

(注意) 手紙や葉書ならば今とか只今とか書きては用を辨ずる能はざれど、電信文はこれにて通ずるなり。頼信紙を見よ。送信といふ所あり、此處に電報を發する時を書き込むなり。受信人の受取電報の紙に受信の時を記しあり受付の時を記しあり。受付の時が即ち發信の時なり、電報を頼みたる時より十分乃至三十分の時なり。されば、之によりてイマの何時なるかの大概を知らる。

3 姉が子を産みました、姉も子供も大丈夫、御安心なさい。

作例 アネアンザンヲトコ 十字。
ヲトコミナタツシヤ 九字。

四 電報文の讀み方。(實物を示して教ふ)

- 1 受信人の所を注意して見るべきこと。
- 2 受信人の自分たるをたしかめて後に開くこと。
- 3 發信人の誰かを見ること。
- 4 本文を讀むこと。片假名のみを(一、二、三の數字は大きく書く)以て書きあれば、讀み誤

らざる様に二三回讀みて其の意味をさとるべし。

5 受付と受信との時をよく見るべし。

五 電報の打ち方。

次の電報規則の概要を教ふ。

電報に關する規則。

前記参考の所を斟酌して之を教授す。

第十五 藤原鎌足 (四時間)

形式

一 文章 叙事文 兩括式。

第一節 國の爲めに大事をくはだつ。(五十二頁二行迄)
これ全文の冒頭なり。

第二節 かしこき中大兄皇子。(五十頁七行迄)

第三節 皇子と親しみ奉る。(五十一頁六行迄)

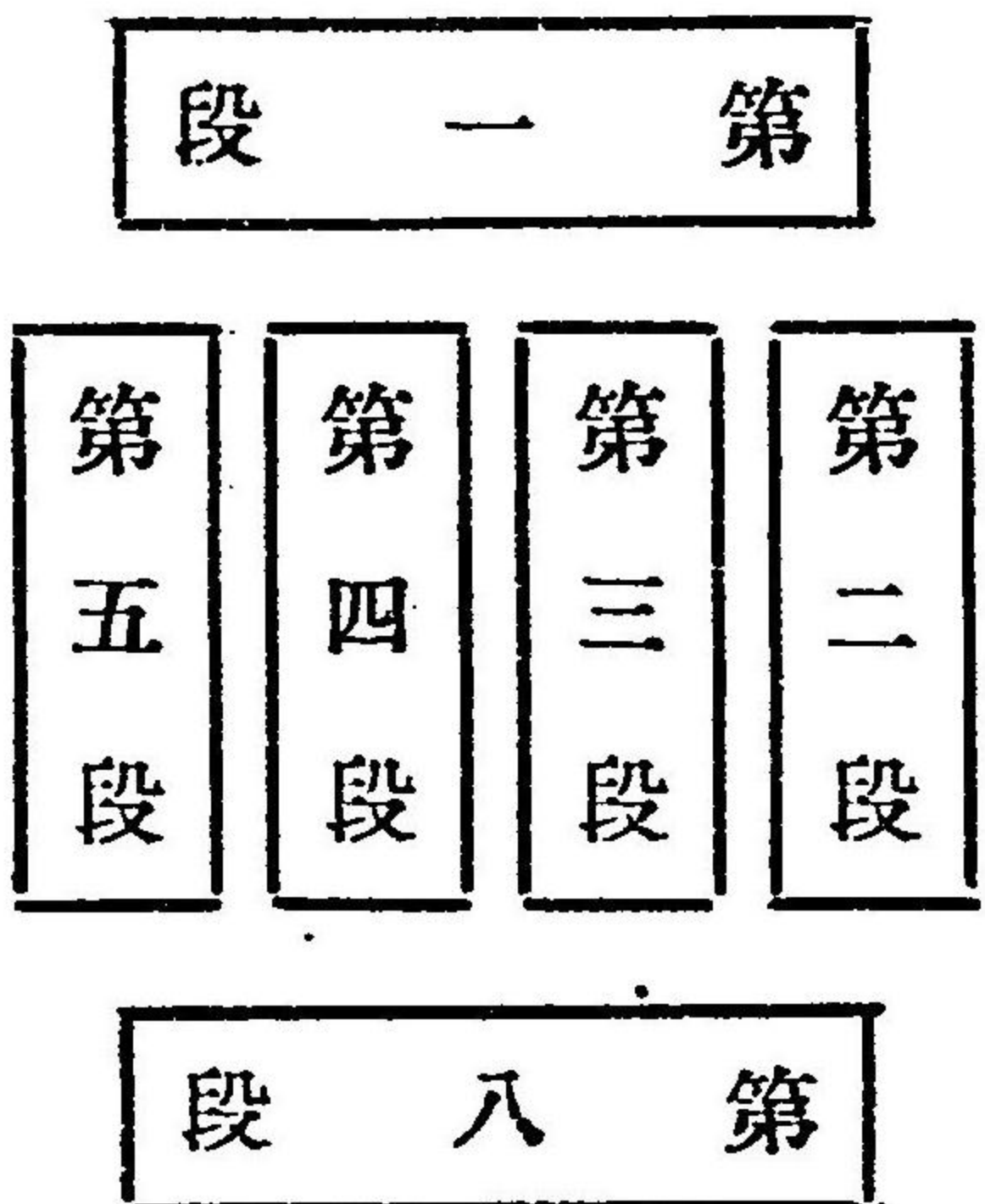
第四節 大事の手はず。(五十二頁二行迄)

第五節 大事をはたす。(五十三頁九行迄)

第六節 藤原氏の一門。(五十四頁五行迄)

冒頭の「國ノタメニ」のに呼應して全文を總括す。

文章構成の形式



二 文字

鎌(金篇に兼。)共(子供六卷第二十一課)頃(二は上短下長。七卷十頁の末と誤らざる様注意。味六卷第十六課。)親(七卷十九頁親。七卷八頁親。)志(七卷四十四頁志。士の下に心。)内(四卷第十二課内。)以侍(人扁寺。寺は五卷第六課。寺は六卷第十二課。)類字待持五卷第八課。)故討殺殺位(人扁立四卷第二十三。)即功(類字切五卷第八課。)

三 語句。

ホシイマ、(思ふがまゝ。わがまゝ。きまゝ。)フルマヒ(振舞。しわざ。おこなひ。みもち。行爲。舉動。)ウレへ(憂。しんばい。かなしむ。なげく。)ノゾク。(除去。無きものにする。とりのく。)思ヒタツ。(思慮を定む。企畫。)人トナリ。(人がら。人のたち。人のもちまへ。性質。)シタフ。(慕。なつかしく思ふ。こひしく思ふ。其の徳を仰ぎて、従はんと思ふ。)大事(重大なる事。尋常ならぬ事。)ケマリノ會(ケマリは蹴鞠。まりを靴にて蹴上ぐる古代の遊び。ナカバ(半。なかごろ。前中。)ヒザマツク。膝を曲げ衝くの義。ひざをつきて曲み給ふ。)サ、グ(捧。謹みて手に持ちさし上ぐ。)カタラヒ(はなしあふ。約束。)ミツギ。(「つぎ」の敬語、屬國などより、君主に一定の時にたてまつる財物。)アラカジメ。(豫め。かねて。前以て。)表文(天皇に申上ぐる言を書いた文。)手ワナ、ク手がぶるくふるふ)

内容

- 一 藤原鎌足の功績を敍したるものなり。
- 二 知識教授の方面。

- 1 此の話は今より千二百年前の昔なり。
- 2 入鹿父子のわがまゝ不忠。

3 鎌足の忠節深謀遠慮。



- 4 同志と之を決行す。
 - 5 天皇補佐の功勞。
- 三 德育の方面。

鎌足の此の事蹟によりて忠義の貴ぶべきことを教ふ。

教授

- 第一時 第一節及び第二節 讀方。
- 第二時 第三節及び第四節 讀方。
- 第三時 第五節 讀方。
- 第四時 第六節讀方及び總括。

(注意)

本課は、歴史上の重要な事蹟を簡明に敘したるものにして其の用語文字文法等の高精度のもの少からず。特に注意して教授もし、練習もする必要あるべし。

参考

- 一 天智天皇、舒明天皇の皇子にして御母は皇極天皇なり。
- 二 藤原鎌足。一名は鎌子、中臣氏。御食子の子なり、常陸國にて生る。孝徳天皇未だ御位に、つかさ

りし頃に於て鎌足を近づく。鎌足その知遇に感じ、ひそかに思ふ所を申し上ぐ、この時にあたりて、蘇我入鹿不忠のふるまひ多し。鎌足慨然として濟世の志あり。宗室諸王の中、有爲の主を察し、即ち意を中大兄皇子に屬し、相共に之をはかる。然れども人の嫌疑を恐れ、之をさくるの方
法として、周孔の道を時の名高き學者、南淵先生に學ぶに託して相往來す。同志を集むる第一策として皇子をして蘇我倉山田石川麿と婚し其の女を納れしむ。石川麿赤心を開きて皇子を奉戴するに至れり。次に鎌足また佐伯子麿、葛城稚犬養網田を以て與黨とす。皇極天皇の四年六月三韓進調の日、入鹿を殺したるは。讀本に敘する所の如し。孝徳天皇御位につかせらるゝや、鎌足を内臣となす。大化の改新は、これ皆中大兄皇子と鎌足との畫策より出でたるものなり。天智天皇即位の二年十月、鎌足病あり、天皇其の邸に親臨して病を訪ひ、尋で皇太弟大海人皇子を遣はし大職冠を授け内大臣となす。また姓、藤原を賜ふ。同月薨す。大和多武峰に祭る談山神社これなり。

三 挿畫の解。

- 1 大極殿 この畫の場所は大極殿なり。天皇、臨御、政事を見らるゝ所にして、また、國儀大禮を行はるゝ所なり。
- 2 ミスの中こそ、かしこくも天皇陛下の臨御し給ふ所なれ。

- 3 肩の所に斬りつけられて倒れたるが、入鹿なり。
- 4 斬りつけ給ひたるが中大兄皇子なり。
- 5 弓を持ちて柱のわきに立ち居るが鎌足なり。
- 6 此の時代の服裝について説明すべし。
- 7 床は悉く板にあらずして石又は煉瓦の類にて造りしなり。

第一時

要目

一 第一段及び第二段 讀方。

- 1 蘇我入鹿父子のわがまゝ、不忠のふるまひ。鎌足、國の爲に之をのぞかんとす。(忠義の志)
- 2 皇族中に共に大事を成すべき御方を求め、中大兄皇子を奉ず。

二 文字 共 頃 未ダ。

三 語句 ホシイマ、フルマヒ。ウレハ。ノヅク。人トナリ。シタヒ。大事。

準備

一 挿畫擴大畫。

- 二 天智天皇藤原鎌足の御肖像。
- 三 談山神社の寫真或は繪畫。
- 四 近畿地方の地圖。

教授

一 掛圖及び插畫の觀察。

1 天智天皇藤原鎌足の肖像、(えらい御方であること。今より千二百年ばかり前の昔なること、この御方々が次の如き大事を爲し給ひしこと。)

2 入鹿を討ち給ふ繪畫及び插畫について説明。

3 準備したる寫真繪葉書等の説明。

二 範讀教授。

二回に分ちて之を授く。(第一回は、第一段、第二回は第二段)

1 第一回範讀教授 之をなしつゝ、左の字を板書す。

共ニ 不忠 中臣鎌足 思ヒ。

次に範讀を示すこと二回。次に兒童をして朗讀せしむ。數回。

2 第二回、第二段の範讀教授。此の際の板書。

頃、早く、奉リ、大事、未ダ。

次に範讀を示すこと二回、次に兒童をして朗讀せしむ。

三 本文朗讀。

1 二人をして一段づつ朗讀せしむ。かくすること二回。

2 全體の兒童をして齊讀せしむ。一回。

四 範讀及び語句の教授。

1 文章結構表に由り全文構成の大意を説く。

2 語句の應用。

イ 先生のゆるしも得ないで、ほし^いま^まにせき^をはなる。

ロ 言ふこと、すること、すべて、ふるま^ひがやさしい。

ハ 人となり^がやさしい。人となり^があらく^しい。人^のた^ちがよい。

ニ 親は子^を愛し、子^は親^をしたふ。

ホ 君の大事。國の大事。家^の大事。國^の大事にくらぶれば、家^の事はみな小事なり。

ヘ この上は、先生にたづぬるより、他^に道^なし。

ト 先生にお目にかゝる折^を得^ざりき。

五 書取練習。

- 1 藤原鎌足ハ今ヨリ千二百年ノ昔ノ人ナリ。
- 2 中大兄皇子ト鎌足トハ共ニ不忠ノフルマヒ多キ入鹿父子ヲノゾカントセリ。
- 3 此ノ頃ハ、メツキリ寒クナリマシタ。
- 4 氷ハスデニ、ハリタレドモ雪ハ未ダフラズ。
- 5 サキ頃カラ、太郎サント共ニオサラヒヲハジメタガ未ダ、ウマクデキヌ。

第二一時

要目

- 一 第三節 皇子と親しみ奉る 讀方。
第二節「近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ」を承け 皇子と親しみ奉るべき機會を得たることを骨子として教授す。
- 二 第四節 大事の手はず 讀方。
第三節「時ノイタルヲ待テリ」を承け 時は至れり 機逸すべからず 同志の人々は其の畫策の爲め如何に審議熟考を凝されしかを想起せしむ。

三 文字 内。 以。 親 志。

四 語句 三韓。 ミツギ。 參内。 大事。 アラカジメ。 手ハズ。 ケマリノ會。 ナカバ。

ヒザマヅキ。 サ、グ。 同志ノ人々。 カタラフ。

五 次の如く二段に分ちて教授す。

1 第三節の教授。

範讀二回、次に兒童をして讀ましむること數回。次に齊讀一回。

2 第四節の教授。

範讀二回、次に兒童の個人朗讀數回。次に齊讀一回。

五 意義教授（前記参照すべし）

ケマリノ會、ナカバ、ヒサマヅキ、親シミ、同志ノ人々ヲモカタラヒ。ヒソカニ、サル程ニ（サウカウシテ居ルウチにの意）ミツギ、參内、此日ヲ以テ、（此ノ日ニの意）アラカジメ。

六 吟味。

- 1 昔のケマリと今の球戲との異同。
- 2 「カタリテ」と「カタラヒ」との異同。
- 3 「以テ」と「持ツテ」との異同。

七 書取 左記の句を聴寫せしむ。

- 1 鎌足を中大兄皇子ノナシ給フケマリノ會ニ參リ合セタリ。
- 2 鎌足、皇子ト親シミ奉リ、同志ノ人々ヲモカタラヒタリ。

第三時

要目

一 第五節 大事をなす 讀方。

第四節「手ハズヲ定メ」を承けて本節に導く。

「手ツナ、キ聲フルフ」「入鹿アヤシム」の句に由りて大事將に破れんとするを想起せしむ。

「御前近ウシテ」の句に由り 將に破れんとせし難關わづかに切りぬけたる想ひあらしむ。

「恐レテ出デズ」「今シバシタメラハバ事アラハレントス」の句に由り、手に汗を握らしめん事を期す。

挿畫觀察に由り、當時の狀況に對する觀念を一層深からしむ。

二 文字 侍。 故。 討。 殺。 自殺。

三 語句 大極殿。 表文。 ツナ、キ。 タメラフ。 コラヘカネ。

準 準

一 挿畫擴大畫。

教 授

一 文字 語句 摘書教授。

二 挿畫擴大畫につき、左記の事項を觀察せしむ。

- 1 弓矢を持ちて立てる人。一人の肩を切りつけてをる人。 刀をふり上げて切りつけんとする人。

三 第五節 範讀。

四 同上 朗讀 齊讀。

五 左記の設問に由り、文章の理解を確實にす。

- 1 (挿畫觀察) 鎌足はどれか (弓矢を持つて立てる人) 文章のどの句で知るか。
- 2 (同 上) 皇子はどの方か (入鹿の肩を切りつけてをられる方) 文章のどの句で知れるか。

3 第四節 「手ハズヲ定メタリ」

如何に手はずを定めたか、簡単に話してごらん (第五節の文章より推敲せしむ)

- 4 本文中入鹿の威力勢力の非常なりし事を知るべき句あり、どの句であるか。
(手ワナ、キ聲フルフ……御前近ウシテ) (入鹿ヲ討ツベキ手ハズ……恐レテ……)
- 六 第五節 達讀。

第五時

要目

- 一 第六節 藤原氏の一門 讀方。
- 二 文字 位 卽 功。
- 三 全文 總括。

教授

- 一 第六節 朗讀 (新出文字は兒童の質問をまちて摘書教授す)
- 二 左記の質問に由り、文章の理解を確實にす。
 - 1 鎌足の初の姓は何といつたか (中臣) 後には……(藤原)
 - 2 勝手に藤原姓を名のつたのか (天智天皇からたまはつたのである)
 - 3 藤原の姓をいたゝいた時分の鎌足の地位と、中臣の姓の時分の地位とを比べてごらん。

4 鎌足がかく重く用ひられた理由は何であるか (蘇我氏をたふした時の功を初め其の後も天智天皇をたすけ奉りて功が多かつたから。)

- 三 第六節 達讀。
- 四 全文 達讀。

五 適宜の設問を用ひ、各節に小題目を命名せしむ。

六 左記の各句につき設問若くは話述を行ひ、文章の理解を確實にす。

- 1 「國ノタメニ入鹿父子ヲノゾカントス。」
入鹿父子を除かざれば、如何なる危険を國家に及ぼすやもはかり難し。
されど微力なる鎌足が威力強大なる蘇我氏を除かんとするは、恰も螻蛄の斧に向ふが如き感あり。

- 2 「大事ヲ成スニハ此ノ皇子ヲイタキ奉ルヨリ他ニ道ナシ。」
入鹿を除かん事は二人の力の及ぶべきにあらず、廣く同志を募らざるべからず。
同志を募らんには、徳望あり、地位ある方を戴く事肝要なり。
- 3 「近ヅキ奉ル折ヲ得ザリキ。」
皇子と鎌足との身分の懸隔甚だし。

- 4 「皇子ト親シミ奉ルコトヲ得。」
禮儀の交り、意氣の感應、自然に水魚の間柄となる。此の隔てなき間柄はやがて互に大望を打ちあかす。
- 5 「此ノ日ヲ以テ大事ヲオコナハン。」
好機逸すべからず。
- 6 「手ヲナ、キ聲フルフ。」 「恐れて出でず。」
かねてたくみし事なるが、いざといふ場合に至り、戦慄して手を下す態はず。蘇我氏の威勢如何に強大なりしかを想像するに餘あり。
- 7 「シバシタメラハバ事アラハレントス。」
危機一髪、此の時に當り沈勇なる皇子、よく大事を果し給ふ。

第十六 鳥 (四時間)

形式

- 一 文章 説明文 彙類的散鈔式。
おもなる鳥類の形態特徴を彙類して、面白く敘述したる説明文なり。

- 第一段 翼の大小と鳥の常習。(五十五頁六行迄。)
 - 第二段 はぎ首嘴の長短と鳥の常習。(五十七頁六行迄。)
 - 第一節 はぎの長い鳥。(五十六頁四行「はなはだ小さい迄。)
 - 第二節 首嘴脚の形態様々。(五十七頁六行迄。)
 - 第二段 目と尾ばね。(終迄。)
 - 第一節 おそろしい目。大きな目。(五十八頁四行迄。)
 - 第二節 尾ばね。(終迄。)
- 二 本文章の組立、

